

の随一として所謂彦根佛壇は京都と覇を争つて、その生産高年額五十餘萬圓販路は全國に及んでゐる
こいふ素晴らしい。

名物紅蕪漬。彦根第一の名物だと言はれてゐる。「鯛よりは嬉し彦根の蕪漬」の句もあるとか、あの鮮やかな緋の蕪漬はお城の見えない土地では決してあれだけの鮮紅色を見せないと言はれてゐる特産で、毎年霜月から師走にかけて、磯から八坂から未だ明けやらぬ朝霧の中を擡の音も忍びやかに舟こいふ舟が赤かぶらを満載して蘆や真菰のうら枯れた霜白い堀を静かに上つてくる。これが醗藏されてその鮮やかな色を失はず一種特別の甘美の味を以て彦根名物紅蕪漬として珍重される。

益壽糖。これは統のやうな肌をした、高尚なアツサクした一種獨得の甘味を有つた餅のやうな菓子である。その昔彦根本町にもとは絲屋であつた重兵衛の妻まゝ女の奇特なる崇佛さ、勤勉とによつて工夫創製されたもので今でも絲重の益壽糖といつて古來江湖に喧傳されてゐる。前記ます女は九十六歳の高齡を保ち、益壽糖は東本願寺の碩學香樹院徳師の命名で、益壽の効があるとか、畏くも大正天皇御買上の光榮を忝うしたといふ。聞けばこれに使用する砂糖は僅かに阿波の國から出る「和三盆」でなくては出来ぬといふ特色をもつてゐる。

菓子ではこの他に金亀豆板、彦根甘納豆、彦根松風、苔の零なきがある。

水産物はさすがに地元だけに多い。季節々々て鯉、鮒、もろこ、はす、小鮎と松原の蜆、小鮎の時

雨煮や鮒壽司も亦名物とみてよい。特殊なものとしては食用蛙がある。もう一つ特別なものに彦根の風土病としてマラリヤも数へられよう。

「御多賀杓子に強飯つめて」と唄にはあるが多賀はチト離れすぎる。昔は有名な湖東焼の本場、彦根刺繍に彦根屏風、それからトツと近年養魚場の関係から何千何萬羽と夥だしく増殖した鳶、特に城山を中心として大空に輕舞するこんびの景観美を以て彦根名物のとゞめとしよう。

鳶飛んで城あたゝかき小春かな。





修學旅行記

第一日 五月五日

この日を我等ごんなに待ち侘びたことだらう。入學以來片時も忘れ
た事のない當日は遂に來た。歡喜に躍る胸を押へて學校へ向ふ。ぎつ
しりと詰込まれた鞆も今日は何となく軽く、空を征むやうな心地がす
る。前庭に集合全員點呼を受ける。校長先生の顔にもいつしか微笑が
漂ふてゐる。城山の晚鐘が五時を報じて間もなく、隊伍を整へて驛に
向ふ停車場には早や見送りにわざ／＼來てゐて下さる諸先生の顔が見
える。小憩の後プラットホームに出た、五時四十九分汽笛一聲列車
は動き出た。お見送り下さる諸先生にお禮を言ふと共に馴染深い彦根
の驛に一週の別離を惜む、列車は黒煙を後に次第に驛を遠ざかつて行
く、窓外には湖間のパーラマが次ぎ／＼に展開されて行く。ドンヨリ
と曇つた雲の中から一株の光線が投げかけられてゐる。さながら我々
の前途を祝福するが如くに。夕闇の迫る中を列車は一路用へ南へと驛
進して行く。安土の城跡もいつしか過ぎ日はしつぷりくれて夕闇が湖
面を蔽つてしまつた大津膳所の燈火が湖面に映じて黄金の波を漂渡し
てゐる。懐しき湖國も逢坂山トンネルを過ぎるさ見えなくなつてしま
つた。列車が込んでゐるせいか談笑も聞えない。東山トンネルを過ぎ

る燈火が急に増加——イリミネーションが此處彼處に點滅するのが
見える。京都着、乗客は崩雪をうつつて下車して行く、さしも込んでゐ
た列車も見る間に一人も居なくなつた。我々も陸橋を渡つて下關行の
列車に乗換えた。發車までに三十分餘あると聞いてスタンプを押して
行く者もあれば雑誌を買ひに走る者もある。落着いて見るさ急に忘れ
てゐた空腹がこみ上つて來た。辨當を出して喰ひ食ふ、かくして乗客
も次第に増した京都を後にした時は乗客が比較的少なかつたので盛ん
に高談に花を咲かせ笑を爆發させてゐる又一方小説を夢中で讀み耽つ
てゐる者もある。頭の中に遠闊の風景を想像し獨り喜ぶ、窓を開け夜
の冷氣を腹一杯呼吸して小説を讀み續けた。列車は大坂驛に迂込んだ
流石は關西第一の大會だけあつてその乗り降り客の夥しきさまに
驚歎せざるを得ない。中天を摩する大煙突群も宵闇にかき消され赤い
灯青い灯が森漫と流れる淀の堤に映じて目も醒める心地がする。實に
夜の大坂は晝の大坂と其の趣を一變してゐる。美しく舗装された阪神
國道が線路に並行して續てゐる。一つのシャイトに三人づゝ腰掛けて
ゐるので身動きも出来ない。談話の聲も低くなつた。しかし誰も寝て
ゐる者はない。恐らく明日訪れる宮島の絶景に見入つてゐるのが或は
郷里の冥想に耽つてゐるのだらう。楠全六百年祭で賑ふ神戸を後に列
車は暗黒の世界から世界へ驚進し續けてゐる。僕はまだ小説に讀み
耽つてゐた。暫して五味先生が早く眠るよう注意に來られた。立つて
ゐた乗客達もトラツク等を臺にして眠つてゐる。僕は巨君と共して大
きな大人の二人で腰を掛けてゐたので窮屈でも眠るどころの
騒ぎでなかつた。然しあちこちから微かな寢息も聞えて來たので眼ら
うさしたが却へて目が冴えて眠れない。時計はもう一時を指して居

た僕もその頃から夢路を辿つて行つたらしい。後は何も知らぬ(長谷川)

第二日 五月五日

汽車が旅行の夢をのせて走つてゐた。それは不眠の一團、眠の世界
で門前拂を食つた一團、今は旅行の夢が、現實の旅行が、嬉しきで何
だかわからなくなつてゐる。たゞ汽車は一部の人の眠の夢、不眠の一
夜の現實の夢をのせて急テンポにどんどん西へこんでゐる。

外を見るさ風もない、月もないまっ暗な闇。しかしよく注意して見
ると空はダイアモンドで一面に晴着のかざりを着けてゐる。無難作な
しかも天然の統制の美に見される。

美しい姿だ、今まで平地山地を走つた汽車今はどうやら海岸を通つ
てゐるらしい。かすかな漁火に躍る金波銀波のまたまき、漁師のうす
黒いかけ海岸の松並木を通して見える趣は詩にもなりさうである。た
ゞ惜しいのは少しあたりの展望の短いことである。

「明石だ」と叫ぶ。汽車がプラットホームに入る電燈の下に明石の文
字が浮きでゐる。

今までの景色、昔からの名所明石、もつこはつきり見たい僕等、し
かしまだ夜更だ想像の明石を心に畫がく、見ようとしても見えられ實
景汽車は遠慮なく出る。海岸遠く點燈あざやかに汽船が走つて行く思
出の明石よさらば——

單調な汽車の旅夜よ早くあける。から思つてゐる中になんだが東の
空が白らんで來たように思つた。そして木の影森の影、山の影が黒く
現はれる。今地球は眞黒な夜會服を片袖ゆるいで朝の華やかな色彩の
服に着かへようとし始めた。

東の空は、みみて、さゝやきかける淺緑、里々の森、霧霽れて輝や
きまざる朝ぼらけ、鳥の聲は高らかに朝日を告げて高く鳴く。

この壯涼、新しいリズムに躍る僕等の胸、萌黄鮮かに向ふ我等が旅
行、旅は人生の肥料とも云ひたくなる。住みなれた故郷を遠く新なる
天地に接する時の喜はたゞ吾等若人の感激である。

太陽は山の端を軌り出て與ふ十二の光線。

祝福された吾等車窓より首を出してちり一つない朝の空氣を腹がば
いに吸こむ、爽やかな朝だ。やがて汽車は海田市に着く、吳線の分岐点
である。又海こんどは着海である朝日にかがやく海がきら／＼朝風
に小さく輝いてゐる。瀬戸の空さぶかめも光る。廣島を過ぎる。今
は中國第一の都會だ。

ホイッど又汽笛がなる。何度か聞いた汽笛だが今度は宮島近しの號笛
である。高らかな音清らかな朝、五時四十九分。正に最初の目的の宮
島だ。一同飛ぶように降りる。もう驛前の淺橋には連絡船の短く幅の
廣い奴が待ち受けてゐる。「飯野先生だ」と云ふので眼を向けるうそれ
は見流れるここの出來ぬ先生の面影がに／＼して立つてゐられた。
船着場に急ぐ僕等は兎のようにはね上つた甲板へ出る爽風が頬をなぞ
た。

「ホイッ」と浦もこぼれけ一聲スクリューが廻る。蒼く澄みきつた水
を切つてすべるやうに動く。前を見渡せば日頃日本三景の一として
もその美しい姿を水に映す。吸ひこるやうな水。したたるやうな縁か
すみに包まれて見える他の島々全く調和の美を現はした絶景だ。飯野
先生のお話によれば先日此所で潜水艦の演習があつたさの事非常時の

日本三景の一として一種の面白味を感じた。しづ／＼と島へよる。

この間わずか十分大島居の近くへ着く目が一齊にこの島居に注がれる。しかし真紅の島居を想像し僕等は色彩の殆どわからないものを見たときは少々がっかりした。けれど上陸してその神さびた歴史の島に來て見れば昔しのばれる面影となつて聲をかけるやうな島居だつた。

参道に群れ集まる鹿、のどかにそのやさしい姿を若草に横たへる木蔭何一つとして僕等に歴史を物語らないものはない。

そよ／＼と風が梢にふれてさ／＼と昔物語。毛利元就胸暗血の雨降ちす。折柄の干潮に鳥居もその巨大な姿を足もさまで見せて僕等の楽しい嬉しさを手をひるげて迎へてくれるやうだつた。

一同す／＼と歩くと十分餘やかた殿島神社に到る。神殿を拜観すべく案内人に随ふそれは遠い神代の昔をそのまゝ僕等の胸に思はせるに十分だつた。朱塗の廻廊も色さめて長くその姿を横たへる。

満潮になればこの廻廊の下まで海水でひたさるさうだ。

神寂びたその有様。緑の木葉や秋の紅葉を映すさまで清い水。水に浮く大島居。夜になれば燈籠の火に映つる神殿。その下にくだける小波。これらの調和ある全美が我等日本人の心に三景の一として指折らずに到つたのだらう。

最初の失望は第一の美しさに消されて今はなつかしさを鳥居に感ずる僕等だつた。

お伽の國でお伽の動物が不思議な昔話をしつゝあるやうに鹿が鳴く一同その美しさにひる／＼と一時間餘。旅の始め、日本三景の一として夢のみ見たこの島は今現實に見て現實に居るのだと思ふと喜は

た。最初のお伽の動物が不思議な昔話をしつゝあるやうに鹿が鳴く一同その美しさにひる／＼と一時間餘。旅の始め、日本三景の一として夢のみ見たこの島は今現實に見て現實に居るのだと思ふと喜は

た。最初のお伽の動物が不思議な昔話をしつゝあるやうに鹿が鳴く一同その美しさにひる／＼と一時間餘。旅の始め、日本三景の一として夢のみ見たこの島は今現實に見て現實に居るのだと思ふと喜は

の日は好奇心で沿線の家、人、草木にすいつけられた。北九州工業地帯。日本の一。呼ばれる中をこれから汽車が通るのだ。

小倉、戸畑の煙突は實に林立し、煙は空に立ちこめてさまざまじい工業日本の面目躍如たるものがある。だが最も僕等の感歎を驚歎にしたものは八幡製鐵所だつた。鐵の缺乏にあへぐ我が國にあつてその名を外國にはせる大工場。煙はさまざまく何ものをもつらぬくやうに壁間より輝いてゐた。

力強よき哉我が日本。萬一あらばの時を思ふとさき更にその感は深かつた。

僕等は八幡の發展をいひつて八幡に別れる。

九州の心臓が健やかなさき我が日本元氣だらう。交通の要津として又歴史に名高い神武天皇御東征の切りの岡田宮を河口にひかへた遠賀川を渡る。

しばらくして香稚に着く。神功皇后新羅征伐で名高い。多々羅川で足利尊氏が菊地武敏との戦で挽回した事を思ひだして又ぐん／＼と走る。

車内は日をあびてむせるやうに暑い。皆つかれたやうにふら／＼したり、あびの連發に時を過す。

汽車が今箱崎を通る。箱崎神宮へ車中ながら敬意を表はす。

間もなく博多だと思つたとき、一同ほつとした車窓よく遠く博多の市が見える。待望の博多。長い汽車の旅に飽きて足はすぐにもさび降りようと思つた。「博多」「博多」一齊にさび降りる。汽車が出て行く。僕等は驛前に集合、ふと見るに小野先生が立つて居られた。久方振で

厭喜を増した。喜びの中に朝食を終る。やがて又出發。何もなくながしい島。いつまでもついて来る鹿の眼。僅なれど今は故郷のやうな島。けれど旅の行程次点への時間は迫つた。ふりかへり／＼今島を離れ行く船上より鳥居、社に別れる。潮がさして水に浮んだ鳥居が高い体でいつまでも僕等を見送つてゐた。水飽くまで清い殿島。あゝ殿島よさらば——。緑よ ヨバルトよ、さらば——

「ボート」名残り惜しくも汽車が出る。

殿島の姿が次第に遠くなる。鳥よいつまでも僕等を忘れずに——又單調な田、畑、岡、森、人家、の行列。そしていやなトンネルをもぐらうやうにいくつ／＼とくぐつて行つた。

徳山海軍燃料廠が車窓より見える。汽車が愈々下關へさ向つてゐた真黒くすすめられた下關のプラットホーム。うす汚ない港町。しかし僕等は本州最後の汽車の一きしりに勢よく躍り出た。

やがて波止場へ行く。關門連絡船へ移つる。波もない海狭目前には九州の山々が手招きしてそば立つてゐる。「ボート」一聲。船は本州をはなれて未だ見たこともない九州の新天地へと本州を離れ行く。

竿もさび／＼かと思ふ向ふ岸門司の市が陽に光る。船ははつらつと進む港町の明らかな気分、水上警察の美しいモーターボートが目まぐるしく飛び廻る。種々の外國氣船がいかりを下してゐる。

活氣ある海の港。スクリーエーの跡が線を畫く。港は赤、黄、緑、青色々の色彩で埋められてゐる。船はもう門司へ入つて行つた。和やかだが華かさはない。一度九州の地に第一歩を降したとき僕等の頭にはいる／＼な想像がぐる／＼と走馬燈を作つてゐた。

驛が動く——かの如く汽車が出る。舊代の汽車が危なげに走る。僕等

會ふた先生の御顔、相變らず御元氣だ。

九州文化の中心地。九州の第一都市博多は美しい街だ。すぐに旅館へさ向ふ。東洋館に着く先生は部屋割當で急がしい。やがて割當がすんで旅装を解くさつぱりしてしばらく休む午後六時である。夕食がすんで外出がゆるされる門限は九時。僕等は短いなあと思ひながら外へ出る。美しい街だが道が知らない。近所を歩くだけでは時間は充分だつた。九時點呼。一同集合する。大きな箱包が持ちかへられる多分博多人形だらう。そして床に就いて消燈される。旅館の最初の一夜。皆の感想などが小聲でひ／＼と——しかしその聲も時間につれてだん／＼消へやがて夢の國に落ちこんで安らかに夢の旅行を續けて夜が更けて行く——。(望月)

第三日 (五月七日)

博多の宿の朝早く私達は何處からともなく流れて来る哀調を帯びたオキユトウ賣りの聲が寝耳に忍びよるのを覺えました。かくして憧憬の九州の第一夜も明けし行きました。

私達一行は薄いタイシヤ色の心太の様な異郷の名物、オキユトウに朝食をすまして、ヨバルト色に晴れた空の下を兩側の人形店を眺めつ或は堂々たる福岡縣廳を車中より眺めたりし、お出迎へ下さつた小野先生と共に大濠公園に向ひました。

大きな沼を圍んだ緑したる様な新緑の公園。修近の文化住宅が沼に映する様は恰も西洋の風景畫を見る様でした。

やがて大濠公園を出でて、プラタナスの並木を抜け西公園に赴きました。光雲神社の石鳥居を過ぎて拜殿の手前を左に折れて、不圖見ゆけるに燦々降り注ぐ初夏の太陽に大きな雲像が、書き出されてゐま

した。平野國民の像です。

臺灣の花咲乱る坂道を上り、青銅の鳥居を滾ります。此處には彼の二十一萬石の黒田公が齎つてあります。此處も亦眞紅に染める櫻の園。鬱々森々たる松楓の間を滑り、吉岡大佐の像を左に見て丘上の眺望臺より博多灣を下臨する。今朝は開引く朝霧の爲、海の中道や殘島等眺め得られませんが、極く近くの眼下に博多灣の燈臺が白く立つてゐました。白く霞める灣に白帆往來する様は、詩の國。夢の國を思はしめました。やがて西公園を後に、電車で市中を通り抜け、箕崎宮へ向ひました。此處箕崎宮は福岡の東郊三九餘町、博多の磯近く「千代の松原」の中に在り、市街と接続し、風光明媚の地であります。波の打返す音を聞きながら宮に詣うてます。醍醐天皇の御筆と傳へらる「敵國降伏」の額の掲げられた樓門の前に立ち、樓前の平和の使鳩の飛び舞ふ姿を眺めて、元寇來襲の際兵燹に罹り、修羅の巷に化せし往時を思ふ事は到床不可能なほど、此邊は平和の極みでした。其の後二度の兵燹に罹りし樓門も、小早川隆景建立して此處に三百餘年今は古色蒼然として神々しく思われます。尙富宮は官幣大社で豊田別尊を祀り、宇佐、石清水と併稱せられ歴代の尊信篤き宮であります。此處を辭して大きな小學校の横を通つて、磯づつに東公園に出ました。「千代の松原」の磯馴松に吹く風も和やかに、眩しく光る眞砂をさく／＼と踏みしめて行くと、突然松の間から天を壓するかの如く屹立する巨法師像。私達一行は思はず驚歎の聲を發せずにはいられません。其は實に巨大な日蓮上人像でした。私は此の日蓮上人が此の元寇の古戰場博多に立てられるのを不思議に思ひました。が、其の像の臺石の側面に鑿造されている畫面に依つて、私の疑問も直ちに解決されました。其に依ると、此の英僧日蓮上人は元寇以前に立正安國論を立て大國難に來る豫言をなし、國民を自覺せしめようとしたが、時の執權北條時宗は、上人は人心を覺醒する者として由井ヶ濱で打首しようとしたのが助けられたのでした。やがて上人の變言が當つて使寇の大國難。其の關係で大變言者日蓮上人像を此の地に建立したと云ふのでした。濛々立ち込む線香の煙の中に珠數をつまぐつた上人。其の邊で一心に題目を唱へる善男善女。私達に目もくれずに。私達は今更ながら信仰の力の偉大さに打驚かすにはいられません。やがて少し歩を運ぶと、またもや空を壓して尊いお方の東帶姿其は元寇時代に尊き御身を以て國難に變られんとされた龜山山皇です。御立派な御英姿の下に「敵國降伏」の四大文字。嚴然と異國の空を望んでゐられます。此のおそれ多き、復聖徳を拜し奉まつりて私達一行は旅行以來の胸の躍動を抑へて小時感慨無量へした。丘上より見渡すと、や、晴れた博多灣は藍色に光つてゐました。手前の堂々たる建物は帝國武徳殿福岡支部で私達は其の見學を許されました。やがて私達は盡きぬ名残を惜しみつゝ、風光明媚の東公園を發して東洋館で旅裝を整へて、人形の國、夢の國、詩の國、オキョトウの國——博多に哀愁を覺えつゝ、憧憬の地を去つて行きました。

に解決されました。其に依ると、此の英僧日蓮上人は元寇以前に立正安國論を立て大國難に來る豫言をなし、國民を自覺せしめようとしたが、時の執權北條時宗は、上人は人心を覺醒する者として由井ヶ濱で打首しようとしたのが助けられたのでした。やがて上人の變言が當つて使寇の大國難。其の關係で大變言者日蓮上人像を此の地に建立したと云ふのでした。濛々立ち込む線香の煙の中に珠數をつまぐつた上人。其の邊で一心に題目を唱へる善男善女。私達に目もくれずに。私達は今更ながら信仰の力の偉大さに打驚かすにはいられません。やがて少し歩を運ぶと、またもや空を壓して尊いお方の東帶姿其は元寇時代に尊き御身を以て國難に變られんとされた龜山山皇です。御立派な御英姿の下に「敵國降伏」の四大文字。嚴然と異國の空を望んでゐられます。此のおそれ多き、復聖徳を拜し奉まつりて私達一行は旅行以來の胸の躍動を抑へて小時感慨無量へした。丘上より見渡すと、や、晴れた博多灣は藍色に光つてゐました。手前の堂々たる建物は帝國武徳殿福岡支部で私達は其の見學を許されました。やがて私達は盡きぬ名残を惜しみつゝ、風光明媚の東公園を發して東洋館で旅裝を整へて、人形の國、夢の國、詩の國、オキョトウの國——博多に哀愁を覺えつゝ、憧憬の地を去つて行きました。

た爲梅樹が多く其處彼處に「猛梅」と書かれた梅樹があります。寂然たる神池に二つの大きな太鼓橋が架してあり、新緑の頃まで、太陽に照りせられ青ばんだ空氣が、神さびた此の境内に満ち、實に別天地に遊ぶの感が致しました。此處で不圖私は小學校の「大宰府詣うで」の記を思ひ出しました。

繪馬堂を左に見て神前に額きました。一度は高位高官に上られしお方が、心にも在らぬ事を譏奏され給ひて、彼の華やかな御前生の末期に淋しく、謹しみ深く三年の月日を常に「都府樓欄看五色」觀音寺只聽鐘聲」の心持で送られたこの事、又公が「君がすむ宿の櫓をゆくこかくるまでもかへり見しはや」と都遠くなり行くを心細く思され、詠じられし公の心中を思ひ遣る時、有爲轉變の世さば云ひながら私は少時眼頭が熱くなるのを覺えました。初め醍醐天皇延喜三年二月二十五日道眞公が謫所に擄せられし時、御籠郡四堂邊に葬られんとせられたが、輻輳が安樂寺の地まで來て動かさず、其所を廟所となされたのです。又延喜五年八月十九日味酒安行神託に依りて、始めて神殿を建て天満大自在天神と稱せられたのでした。拜殿は五間社流造、屋根は皮葺であり、社頭の老杉、老樟と共に森嚴を添へてゐます。拜殿の右に木の香も新しい垣の中に、菅公を慕つて遙々飛々て來たと云ふ傳説の「飛梅」がありました。東風吹かば……と住み慣れし庭前の梅への別離を悲しまれし公。公を慕つて遙々飛び來た梅。そは、たゞへ傳説にあるにせよ、私は其の物語の中に「誠心」の二字が含まれてゐるので無いだらうかと思ひました。菅公は字の神様故に傍の廊下に習字がはつてありました。此處で少時自由見學になつたので、社殿の後へ廻ると其處には庭園風な梅園が有りますが、明治三十五年黒田長

成公が菅公會を起し、菅公一千年祭を奉行されし時、寢殿に修繕を加へ梅園を擴張されたこの事でありませう。

小川の傍に紫のあやめの咲いてゐるのも、風韻掬うべく、松の毛氈を敷いた掛茶屋も調和良く見受けられました。歸り道に土産品を買ひ求め、菅公の遷され給ひし柯寺を會學する事の出来なかつた事を、残念に思ひながら、再びカタブスに揺られて二日市驛に戻り、驛前の休憩店で費食を済ませ午後一時起南熊本へ向ひました。車中は相變らずトランプする者。談話に笑ひ興じる者。こくり／＼と舟を漕ぐ者等種々様々の光景でした。途中中々の木も珍らしかつた。

其の内に商工業都市久留米にさしか、り「福助足袋」と書かれた煙突を眺め、少時して左手に田原坂の古戰場を眺めたり、車窓より入り来る景色に打ち興じてゐる中に、三時五十一分第二の目的地熊本へ到着致しました。丁度熊本は、新興熊本大博覽會なので赤白の幕、紅提灯に松々枝、花電車、アーチ、等々相當賑はつてゐました。荷物を自動車に托して電車で水前寺へ行きました。此水前寺は、市の東郊三十余町に在り、寛永九年細川忠利入國の時、豊後羅漢寺の玄宅、此の地に一寺を創建して之を水午寺と申しました。忠利後に寺を園外附近の地に移し其の跡を遊休の地とし、之を水前寺のお茶屋と呼び、後網利に至り成越園(水前寺)十景を選び、明治維新後開放して七庶の供覧に供したのでした。境内は幽邃にして俗塵なく、泉水清冽にして數百の真鯉。鮎。滑刺として、銀鱗を閃めかして行く姿。或ひは躍り、或ひは舞遊し來る様。文芝草萌める柔らかなき假山。泉石の觀美。葉櫻の綠陰にテールを配置せし様等實に私達は唯茫然としてうち眺めるのでした。境内の北隅泉池に面して出水神社が有り、細川家歴代の靈

を配祀され、明治十年舊藩臣相計りて創建したものであります。其の外園内には動物園在りて、初夏の一日を楽しく過すには、最も好適の地でありました。やがて此の成越園に別れて、再び電車に乗り天下の名城熊本城に向ひました。此處も清正公の祭禮で賑はつてゐました。木の上にベンキの塗つてある、モダン大鳥居り通ります。道がだん／＼急勾配になつてまいりました。皆汗を出し、呼吸をはずませながら登りました。斯様な事では明日の大阿蘇征服が氣づかれません。此熊本城は寛永九年清正の子忠廣築き、罪を得て此の地に除封せられ、同年九月豊前中津城主細川忠利此地に封ぜられて五十四萬石を食み、世襲して維新に及んだのでした。明治に至り城は熊本鎮臺の本營でしたが、明治十年西南の役起り、賊軍に圍まれましたが、時の司令官陸軍少将谷干城其く拒ぎ、谷村計介等の忠節美談を生み出して、遂に城を全うした事は、餘りにも其く世人の知る所でありませぬ。然し此の戦に依り一ノ丸、二ノ丸の樓、櫓悉く兵燹に罹り、今は徒らに荒れ果てた跡に白く「第一天守閣址」の札が見られ、老松鬱蒼たる中に小鳥の囀るも、いさ哀に思はれ、只在りし昔を物語つて、あるのは國寶宇主樓のみであります。當城は規模に於て大阪、江戸に及びませんが結構配置は頗る巧妙を極めて居り、巖壁は凹凸多く相重であり、攻兵を容易に登らし得ない点は他に類例が無いと思ひます。其の他城は稀なる用意周到の構造多く實に日本の名城の名は背かざる城であります。其の他牛砲臺、見るも悪寒を感ずる様な井戸等、在りし昔に用ひられしものでん。丘上より町を下瞰すれば到る所に森有り、實に森の都其のものでした。佐藤先生の言に依れば「此の熊本の町は森が多いので、今までに大火がなかつたさうだ」とおつしやつた。やがて第

六師團司令部の傳書鳩飼育所を横に見て、直線の城。熊本城を後に宿の人の案内で町を一巡視しやした。街はサーカス其の他多くの見せ物が華やかに並んでゐました。宿に着き八時迄外出を許された。宵の街は、シネマ、ジャズの響き、イルミネーション、相變らず賑やかでした。宿へ早く歸へつて明日の大阿蘇征服に備へる爲、就床致しました。外は招魂祭と博覧會の二つを兼ねた「踊り」の群が、笛、太鼓、三味線の音と共に喧しく流れて行きました。(西島雅彌)

第四日 (五月八日)

大きな期待と、或る感激と意氣に燃えて、待ち焦れてゐた、まだ見ぬ「火の國」「秘の國」大阿蘇征服の日は愈々今日だ。陽もまだ出てやらの早朝午前四時、元氣一杯床を蹴る。睡眠は充分した。今日は特に体のコンディションも奴い。

急が朝食を終へて電車通まで三々五々集る。熊本の街もまだ五時といへば充分には明けきらず、街燈は淡い睡たげな光を投げかけて靜かなものだ。電車で熊本驛まで行く。靜かな朝の街を電車で行くのもい／＼けれど、快い空気を胸一杯吸つて歩く爽快味は猶更であらうと思はれる。

五時半熊本に暫しの別れを告げて勇躍坊中に向ふ。車窓より見れば熊本市の沃野に陽は既に出て、空は飽くまでコバルトの色に澄み、清涼なる山氣、旭日の光を孕みて金色の光柔かに朝霧を貫きて、廣き沃野に縋ち渡り、田家の煙は相呼應するが如く、悠々として天に上つて行く。今日は五月八日だ。まだ端午の佳節を惜む男の子も多々あると見えてあちこちに勇しい真鯉緋鯉の金鱗は、我等の今日の此の壯舉を

祝福するかの如く、朝風に躍動してゐる。けがて外輪山にかゝる頃汽車は喘ぎ喘ぎ進み、山は益々高くなつて來た。進むにつれて山。又山の山嶽の美は威喝する如く軌道近くに迫つて、阿蘇へ。大阿蘇へ。私達の血を淡らす。かくて一時間半餘の後汽車は阿蘇山麓均中の驛に至る。

さあ愈々登山だ。辨當などは驛前の茶店に預けてすつかり輕い姿になる。ゲートルを結び直して勇氣百倍出發する途中の道路に轉つてゐる石は大底輕石ばかりだ。いよ／＼山にかゝる。路標の文句がいゝ。案山子でさへも笠つけて云、等々私達を元氣づけることばかり。こつ／＼した坂を登つて一合目にかゝる。私達はとも元氣だ。大分木立が少なくなつてやがて青い芝草ばかりになる。三合目にかゝる頃からそろ／＼疲れた。友の忙しさうな息づかひの喘ぎが、氣になつて仕方がない。四合目の棒杭の見えるのが待遠しい。汗は淋漓と流れ、上衣持つ手もじつ／＼汗ばむ。四合目を喘ぎのうちにすぎで愈々五合目だ。此處で少憩。案内人の説明を聞く。外輪山は世界一のこと。生活してゐるのだが、火口原には五萬餘の人が大阿蘇を生活の糧として生活してゐるのださうだ。少しの解散にぞつ／＼茶店に雪崩れ込んで喝きに喝いた喉をうるほす。すぐ出發だ。これからがいよ／＼凄いだ。我等が目指す中岳は、濛々たる黒煙を吐きつゝ、すぐ眼の前に聳えてゐる六合目七合目となるに従つて、熔岩又熔岩の道も険しくなる。馬の背さういふ難關にかゝる。道中は狭い。烈風は濛々火山灰をとこるきらず吹きつけ、汗ばむ体は砂まみれになる。兩側は凄く斷崖だ。幾十尺、否幾百尺とも知れず。若し我等一步を踏み過うへか忽ちにして熔岩に頭を打碎き無慘な死を遂げるの外ないであらう。

あこはいよ／＼噴火口だ。踏みしめる火山灰に靴がくひ入り、烈風更に強く、濛々たる砂煙を上げる。大地は轟々として鳴動し、亞硫酸ガスの臭が強く鼻を突く。さあ愈々噴火口だ。凄いだ。實に凄いだ。噴煙は高く一天に決して、天地は萬雷の轟くが如く鳴動し、熔岩は高く吹き上げられ、大自然の怒に燃えた火の息吹は「凄絶」の二字に盡きる壯觀といふにはあまりに凄いだ。あ、自然よ。御身が怒は偉大なり。阿蘇よ、御身が威力は大なり。

私はこの大噴火口を覗つたとき、幾百尺とも知れぬ噴火口壁に立つて神秘的な火の國を窺いた時、唯々恐怖で足のすくむを覚え、感激で血の湧くを覺えた。

頂上で濛々たる噴煙を背景に一同記念寫眞を撮る。暫時少憩。いよ／＼下山だ。下りはすつ／＼樂だ。列を組まず三々五々散らばつて下りる。少し驅出すと、なかく／＼止るのに骨が折れた。だん／＼下りるに従つて熔岩の道も少くなる。坊中驛前に着いた時は、一同ホツとしたやうな氣持だつた。

晝食を終へて、又喘ぐ汽車に乗り、零時一分熊本に向ふ。熊本驛で荷物を受取り、熊本に車窓より別れを告げ、一路鹿兒島に向つた。熊本よさらば。なつかしの熊本よさらば。

汽車は勢よく平野を走る。汽車までが九州男兒の意氣を見せろのか、激しく揺れて凄くスピードだ。途中の車窓よりの有明の海邊の景色は又格別だつた。山あれば海あり、海追るよと見れば再び山に入る。殊に八代あたりのあのよい景色、北陸の勝地「親不知」を思はするに足るものだつた。揺々たる海のスクエレルは衣の皺を熨すやうに一つづ、

押寄せ来て、岩にあたりてはざぶりと絆け、飽くまで澄める水底には大小さまざまの石が一つ／＼紫色の陰をつくつて横たはり、磯邊の男の子の嬉々として波に戯れるを初夏の太陽は燦々として微笑みかける。畫のやうな海邊と随分なくさんのドンネルを通つて、午後七時四十分歴史の町、偉人の町あこがれの鹿兒島に着き、満州旅館に今日の壯途の疲れを癒す。(的場 皎)

第五日 (五月九日)

五月の淡緑の光線も、この薩摩では幾分それに白さを増して、總ての草葉を溼潤ならしめてゐる。南國の都鹿兒島の爽快な朝の氣は骨髓迄も通る様に細く強く、さうして一時に疲れを浸出してくれた。照國神社：城山の麓にあり島津齋彬公を祀る別格官幣社で、境内に齋彬公、久光公、忠義公、の銅像あり。神社内を一通り禮拜し、その足で我が國南端の押城たる城山へ向ふ。此所は丁丑役に於ける薩軍最後の死守地として名高い城山公園、鬱蒼と繁茂した茂のトンネルを通り、第七高等學校(造士館)：鶴丸城趾の舊御本丸を眼下に見下して、思はず機勢も雙の脚は西南の戦役に南洲翁、孤軍奮闘の城山へ向つて進む。鴨の羽色のささき緑の朝露も流石に爽快味を帯び、城の間からさし込む光線を幾屈折がさして金剛石のそのまゝに全反射でもしてゐる様。急勾配になつてゆく。道行く吾等の前に、メット出た巨木、思はず頭をあげる。一選キ者ハ招クガ如ク、近キ者ハ語ランニ欲ス。といふ墨堤新緑の櫻にも似た趣である。ハア／＼と吐息をしながらも、皆往古を回想してゐる面持ち。路側の一木一草にも他所でみるここの出来ない或種の盡きぬ趣を有してゐることは明かだ。時々木間

隠れに、何かに恐れた様な小鳥の黄色い聲が渡つてゆく。再び眼を縁の中に移す諸所に記念植物の立札がみえる。遂に頂に着いた。一軒の茶店に腰掛敷基とあるばかりで、吾々は豫想を裏切られて唯茫然と立つこと暫し。やがて西郷翁の如き客貌軒偉な御仁現はれて昔談一くさり。しかし言々薩英、西南兩役に及ぶと、吐き出すが如き熱をもつて現場を指して一々物語つてくれた。大西郷を想起させしが如きその仁の顔は見る／＼熱に火照り、最後に朗詠を以てその物語は絶えたが、展望臺より下瞰する鹿兒島灣一帶の風物にば、人心騷擾の昔のふべきもの何一つなく、現代文化蹂躪のものに、唯肆店交錯の影に靜かに眠つてても居る様な近代繪巻を展開してゐる。時々雲がきれて五月とも思へぬ太陽の熱が遠慮なく焼付ける様にツリ／＼と照りつけてくる。先の話に依れば右手街の耶外に、小さい森に包まれた臺地がある。これみ薩英戦に最初の火蓋を切つた天保山砲臺跡である。そとろに當時を聯想せずに居られない状態である。嘗ては世界の東郷初陣の地と言へば、轉た感慨無量ならざるを得ない。誕生地も加治屋町第一高等女學校内にあり、又明治維新三傑の一人大久保公、乃木静子夫人の誕生地も、夫々記念碑と銅像が建てられてあるそうぞす。眼下に繰り展げられた錦江灣の遠望も亦雄大で、東南に望めば、風光明媚、市街、錦江の水に雄大な秀姿を流す櫻島、翠微霞む薩隅の山々さながら南畫の墨繪にも似たり。嗚呼實に天下の景勝悉く此處にあつまれることし。山紫水明の錦江灣沿岸に連なる櫻島、突兀、明姫の裡にも凄慘を秘めた營々の姿こそ無氣味なものはない。行くも行かれぬ心持して第一の目的たる南洲神社に詣つ。途次翁を庇ひ最後の安住地作戦地ならしめた一洞穴を訪れた。紫電一閃、此處に於て感あり。

方一間ばかりの真黒い口を開けて、今は主もなき假宿の悲しさを味へさか。左方に奥深く迷路の如く見えたるのは錯覚だらう。嗚呼!! 絶世の傑人西郷さて今はなく、春の夜の夢さ散りしその花も、地下に永劫の眠りな食つてはゐるか、閉む鑿跡に將たまた一片二片の小石に、大西郷の遷り香は永久に放散し盡すこゝが出来ない或神秘的色合を含んでゐた。抑々初めあるものは終りあり、偉人英雄たるや必ず晩年に涕すべきものあること。次いで、西郷南洲終焉之地なる石碑の前に額き又神社内も哀れ幾百の慕僚勇士の墓碑に、暫しの黙禱を捧げし時、純下の昔に歸る。嗚呼南洲之墓と口ずさむこゝ幾度。歴史的將や將近代的都市鹿兒島も、餘すところ半刻の別れ。涼しき森の中に獨り座して、蜃氣樓の如くに明滅する幻夢を靜かに夢みてゐた。

十一時、一律の汽笛の餘韻をひびかして興奮にも似た動搖の吾等を載せて、汽車は薩摩平野をゆへ。北へ／＼と東なる霧峰櫻島の殘形を網膜に印して。總て平凡な汽車の旅、夢と彩が懸命に吾等の目を染しませうと、車窓を中心に、ゲル／＼と廻轉する。纏て養蠶製糸の中心都城に飛び込んだ。乗換だ。皆外へ一齊に躍り出てホコム内をうろつく。平屋建の家屋が少しくみえるだけと、さして大きな都市とも思はれない。乗心持の良くないシューキングに氣を腐らしながらも、九州南東の動脈日豊本線を這ふ汽車の内は豊かな霧圍氣に浸つてゐる。車窓より眺めた道ゆく人の顔も、何所なく人なつきよく、非文化的に感ぜられた。

大淀補着、前の太田旅館に荷物を預けて、新しいベイメントに輝く遊覽バスに分乗。大淀は宮崎市の一部で、あの霧島山中に源を發する大淀川により、市境づけられてゐる。目抜の橋通りも、彦根には見ら

れない殷盛を極めてゐた。因に九州第一の大河大淀川に架する橋橋は延長三百八十五米、幅員十六米、鐵筋コンクリートにして、タクシーバスの往來頻り、彼岸に橋通りのビルディングを望景色も又彦根の岸橋に較ぶべくもない。長年中央を離れて、非文化的軌道を通つてゐた當市にも、今や新興氣分大いに漲り、目を驚くほどの大飛躍に一段落云つた様子。纏て宮崎神社に着く。清淨の氣にひたる社前で、神社由來の車掌の説明を一通り聞く。立込む杉檜の大樹も神々しく、白木造の社殿も、天孫降臨の傳説と相俟つて、壯嚴の觀深遠思はず襟を正さしめる。社後にバスを連れて逆戻り、橋の袂で左折して開闢な平野に出る。宮崎平野の展望、四毛作をも企てられてゐる。模範林も美しく、車掌の語るローマンチックな安井息軒先生の一代物語も面白く松並木を透して紺碧の海を認めた。待望の青島より、寸刻の後にみる自然の部胸躍らせて下車、土産店を左手に、やがてサンブラチナの砂濱に出る。東九州の海岸に眠る風光繪の如き青島の全景、白砂青松に映ゆる公園より、太平洋の大波濤を背景に、夢の如く渾に浮ぶ青島、なみたさき、若人の血は躍る。小砂が足を嚙んではなさない。やつと木橋に到り、コト／＼と音のしたさきには、一變身も心も南回の彼方に飛び去つた。體然として熱帯の景觀を現する檳榔樹の密林、宛として南洋の熱國を偲ばしめる。海は見えれば、造化の妙巧、青島を繞つて、波濤寄するが如き奇岩層の壯觀、南國の情緒は豊かである。名にし負ふ日南の怒濤は岩石を躍り越え／＼刻一刻と島に肉搏してゐる。息も先陣を争ふ若武者の如くに。少一丁、熱帯植物生ひ茂る淨域に鎮座する青島神社に詣で、鳥を一巡して記念撮影をこる。實に筆舌に盡し難き情越は青島を除いて他に幾つを數へるだらうか。歸途のバス

カールの話は一殺と興をそへ、「昔は此の道を嫁御寮は馬上に花婿は手綱を執つて、シャン／＼……」等には一同爆笑、郷土彦根の話ども交へて、なごやかな裡に驛前着、旅館に入った。九時半の門限を守つて歸宿、一同疲れて言葉少く、間もなく幼な兒にも似た安き寢息が漏れ始めた。(有川)

第六日 (五月十日)

まだ覚めきらの夢破られて忙しく起床時に未明五時半。そゝくさ食事をすませて午前七時〇三分大淀發の列車にて別府に向ふ。まもなく大淀川の大鐵橋を越え、美しさと繁榮さを誇る新興都市宮崎を離れ日向灘沿岸に沿ふ日豊線を汽車は一路北進する。左には今だ千古斧鉞を入れざる山亦山の鬱々たる草木の生ひ茂る神秘境を、右手には太平洋の怒濤逆巻く邊の壯大なる絶景さを眺めて車窓よりの興越は千變萬化して盡きない。

美津津それは日向海岸平野の三角形の一項点なる要地である。大友が島津と戦つて大敗した古戰場美津津川はこのあたり。峻峻な山岳、干山の谷間、茫漠たる日向の海の間をぬつてまもなく汽車は宗太郎越を過ぎた。こゝに我等は神秘の國、美の國、しかして新しい國日向を離れて、大分縣に入った。

暫くは旅に出た嬉しさを見るもの一つ一つに對する驚異さにはしやいだり、車窓に移り行く風景に飽かず眺め入つていた皆も、顧れるにつれてトランプをしたり、横になつて居眠りをしたり、やうやく車内に疲労と倦退の氣が漂ふ。

大分を過ぎると藍色に輝く美しい別府灣が連つて、一抹の淡霞の

させる處。眞赤な朱泥の池にすぎない云ふもの、。恙なくこの遊覽を終り、かくてバスは海岸に沿つた坦々たる二哩半の道路にうつた。彼方に見えるは有名な別府の大佛様か。先程見たのは瓢箪温泉か。雑談に花を咲かせる間もバスは疾走を續ける。別府の町に入つて我々は市公會堂の前でバスを降り、これより解散、自由行動となつた。町を見物したもので、さして見るべき處もなく、ぶら／＼する中、豫定の時間にも近くなつたので別府港の突堤に集つた。点呼もすんで大阪商船の「みどり丸」に上船。この船こそは數ヶ月後、かの千山丸と衝突沈没して多數の遭難者を出した船なのだ。がらん／＼と「ドラ」の音「ホウ」と汽笛を残して、する／＼の子數百艘の白亜の巨船は突堤を離れた。幾百と數限りなく船と岸とに渡されたテープは次第に残りすくなになつて果ては海の中に落ちていつてしまふ。別府の町の灯は次第に夕靄の中に消えていく。上甲板に出るさ、ひんやり冷たい夜氣一頭をななでる。大きな浪の颯が舷に掛ける音とスクリューの廻轉する響、以外何物も聞えない恐しい様な静寂さ。口笛を吹く者がある。ハローモニカを鳴らす人がある。輪投げに興する者もある。この船を我物顔にのし歩く彦中生だつた。ごこまでもす／＼しい彼等だつた。その果は同船の某商業學校の生徒さ危ふく、喧嘩にならうとした事さへあつた。しかも彼等は一中生としての態度と物の節度を忘れぬ上品さとは有してはいたのだつた。見上げれば玲瓏と照る月。故郷に在ます父母も、この月を見上げては旅の吾子の安否を氣遣はれてゐる事やら。遠く故郷を夢見る健百二十名を乗せた運命の船「みどり」丸は暗黒の瀬戸内海を突進してゐるのだつた。(藤田洋三)

彼方に鶴見由布の火山が煙つてゐる。愈々午後一時十四分山水の景麗しき湯の町別府に着きた。直ちに遊覽自動車に分乗して待望の地獄廻りをするのだ。

「四季の氣候も快よき、心つくしの九州に、山と海との眺めよく、いで湯溢る、此の町は、戸數一萬人口は凡そ五萬を數へられ、東西より南より、北より来る内外の、客は一年百餘萬、外國迄も知られたる温泉都市で御座るます」詩吟口調の韻文的なメロデーだ。美しい聲でしかし青島のそれに比べると聊か遜色があるようだ。いつしかこの湯の町情緒豊かな説明に飽かず聴き入る中、大きなショックを感じるさ、バスははや松林の續く田舎道を疾走してゐた。

先づ最初にバスを下りた處は鶴見地獄。

廣さ四坪程の池から沸々熱湯が沸き、滾り、躍りあがつてゐる。億萬兆土の底から沸上るかと思はれるその熱湯の物凄さに、そぞろに恐しさが感ぜられる。更びバスに乗り、五月の青空に心ゆくばかり包容されてゐるかと思へる鶴見山の山麓に入り込んだ。ついでバスをのりすてた場所は鬼石坊主地獄。ごらん／＼した粘土の池で、もく／＼と粘土の塊が不氣味にもく／＼上つてはすぼんでしまふ。次にバスは海地獄に着いた。この地獄は攝氏百二十度の熱湯が噴出してをりその色が紺碧の海の色に似てゐるから此の名があるのだ。バスカールの説明成程耳も聳せんばかりの音響で時々大岩が動揺してゐる。地獄の中の地獄と云ひたい處。次にバスはごごをどう行つたのが僕等が降りた處は瀝地獄。その名の如く瀝狀の石の中から息も何か焚いてゐるが如く温泉蒸氣が噴出してゐる……

血の池地獄。聞くからに凄壯の氣を呼び、見るからに恐怖の念を起

第七日 五月十一日

「ゴトツコッ／＼／」と全身に傳はるエンザンの響、耳もこでざわ／＼とする私語。やあ、これは寝すごしたぞ。と思つて目をあけるさ、まだ周囲の者は狭い中でぐつ／＼と眠つてゐた。眠い／＼。何だか過去四日の旅館の如く、曉に叩き起されたやうな氣がする。

「學生さん方は、早く顔を洗つて下さい。」と一種異様な訛のある係員の聲がした。素破さばかりに洗面袋を引き攜んで突進したが、狭い洗面所の中は既にゴツ／＼返してゐた。團體も一般乗客の區別もあつたものではない。やつ／＼と空所へ割り込んで、湯の栓を押しても水しか出ないのだからたまらない。

通路の隅に疊を敷いて、毛皮にくるまつたまゝ、まだ曉の眠から覺めない人達がある。此の人達は僕等が船室内で白河夜舟の最中に、高溜が今治から乗込んだのかしら。修學旅行團だけでも三つもあるのだから随分詰め込んだのだらう。

爽快な氣分で甲板へ出た。級友達は三々五々手摺にもたれて楽しさうに語り合つてゐる。船員達は甲板の掃除や船具の手入に忙しきうだつた。ついでつかり／＼欄干にさはつたら、金具に今つけたばかりの油がべつ／＼と掌についた。最上甲板に上つて海面を見渡すと、まだ朝靄は晴れてゐない。非常な期待を以て迎へた國立公園瀬戸内海の朝景色は霞に包まれた小島が薄墨色の姿を海に浮ばせてゐるだけだ。船が小島や岬の傍をすれ／＼に通るさきに、僅かばかりの海風に曲りくねつた松や岩が霞の中からうす／＼と浮き出して見える。

朝の流に出かけるのか、それとも魚籃に獲物を一杯満たして濱へ歸

るのか、數百隻の漁舟が堂々として隊を組んで我等の行手を横切つて行く在きな波にゆられながら舷側近く巧みに舷を操りながらにっこりと笑ひた漁夫の顔も瞬く間に過ぎ去つた。きつと彼等は今朝の大漁に喜んでゐることであらう。美しい大自然の中で働いてゐる恵まれたる海子達。恵れたる海の幸。僕は青島で聞かされた兄弟の神々の昔話を思ひ出した。鐵のやうに靜かな海を綠丸は一路高松へへへと快速力で波を蹴立てて進む。

午前六時前に朝食。同船した笠岡商業生は高松で下船するのだ。僕達も未だ見ぬ屋島へも行つてみたい。併し、長い六日間の疲労と睡眠不足が身にしみて感じられる。たゞもう残されたプランは淡川神社参拜だけだと思ふ。萬感胸に追り何だか悲しいやうな氣持さへ起つて来る。單調な霞の海面を眺めて居る。嚴島神社、青島、別府等々過ぎ去つたなつかし思ひ出さなつて走馬燈のやうに次々頭を浮んで来る。舷側すれすれに、同じやうな客船がすれちがつた時、互に氣笛を吹きながらして船尾の日章旗をする。と掲げた。變なことをするぞ、今迄はごくごく多くの汽船を追い抜いて依たのにと思つてゐる。同じ商船會社の大智丸ださうだ。船員がお互の敬禮ですよと笑ひながら云つた。薄曇色の四國の山々が目前に追つた。船は次第に速力を落した。突然「大井だ」といふささやきが起つた。徐々に艦体は大きく見え出した。海軍兵學校の練習艦大井だ。關東旅行に行つてゐたら横須賀で充分に軍艦見学が出来たらうと思つてゐた考が頭をかすめた。船は高松港の棧橋に横附になつた。物珍しさに港内を見てゐると琵琶湖遊覽船位の可愛らしい宇野行の鐵道連絡船が二三隻碇泊してゐる。紺の袂被を着た行商人の賣聲も耳馴れなく面白い。出港。四國よ、さ

ようなら、また何時か機會を得たら吃度訪れるから。
甲板にベンチに腰掛けてゐる。何港で下りますか。船員に問はれて神戸だ。答へたら帽章をのぞく。と見てから「神戸一中ですか」と聞かれて驚いた。我等は遠賀縣の一中生だ。何所の一中にもまけるもんか。

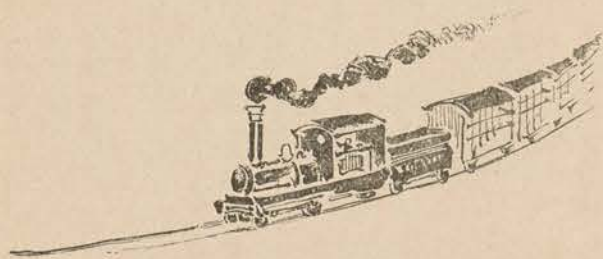
船室に閉ぢこもつて退屈な時を過すうちに晝食となる。すぐ旅装をさくへて甲板へ出た。和田岬を過ぎたがと思ふ。さかや船は港内に入つた。碇を下して多くの艇に圍まれて荷役中の外國通ひの大汽船、大岸壁横付けの客船、埠頭に並ぶ大倉庫、海老茶色の潜水艦、目ぐるましく行き交ふランチの中を悠々内海の女王は進んで行く。

上陸。すぐに隊伍を整へて淡川神社へ参拜す。これまで九州の田舎都市ばかり歩いて来た我々に日本第一の貿易港神戸は何だか新しい刺戟を興へて呉れる様だ。すばらしい流線型タクシーの間を走るクラッシュクナ人力車などは、異邦の訪問者の驚ふ所だらう。壯麗な神殿に類いて無事に我等旅行の終つたことを感謝する。佐藤先生の訓辭後自由解散。直ちに最後の御朱印を得んと争ふ。愈々これがお名残だ。市中見学も早目に切り上げて、神戸補の待合室で疲勞を休めて居る。つひうさうさ眠つてしまつた。

二時半神戸發。丁度旅行季節だからこの車も一杯だ。途中で席を見つけて割り込んだが、つかれの爲にねむって仕方がない。車中で途中下車の人員を報告する。

京都着、東京行に乗換へる。これは大阪始發なのに超満員だ。もうあま一時間半の辛抱だ。車輪の一廻轉毎に我等は故郷に近づくのた。三人五人の級友は減じて行く。途に彦根驛着。驛前廣場で松田先生の御

挨拶を受け、萬歳を三唱して解散す。嗚呼。我等が入学以來待ち焦れて居た修學旅行は、こゝに大團圓を告げた。總ては一瞬にしてもはや過去の憶出さなつてしまつた。一週間の旅路を共にした諸君よ、さようなら。僕は欠伸を噛み殺して無我夢中で家路を急いだ。手馴れた靴は旅行の土産で一杯だ。「只今」「ガラ／＼」と格子戸を開けたその時、思はずホツとして長い緊張が解けて一時につかれが出たやうな氣がした。(青山正彦)



報 部

- | | | | | | | |
|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 七、水泳部 | 六、競技部 | 五、庭球部 | 四、野球部 | 三、端艇部 | 二、劍道部 | 一、柔道部 |
| 報 | 報 | 報 | 報 | 報 | 報 | 報 |

歌 援 應 中 彦

(一) あゝ英傑が夢のあと
歴史は遠く三百年
金亀城頭我立ちて
尙武の風に嘯けば
花たちばなの香に匂ふ
健兒の意氣は天を衝く
氷刀腰に夜泣いて
たぎる正義の血潮あり

(二)

(三) あはれ雲待つ蛟龍
猛者一たび地を揺れば
強風陣々雲捲いて
行く手に敵の影も無し
旌旗は高く天を摩し
金鼓勝利を告ぐる時
月の桂の香にむせぶ
今宵健兒の夢如何に

(四)

●柔道部部報

部員

四年 鳴本光高
佐久間富雄
的場 皎
山内光造
柴田良治
丸野房松
福原快稔
谷 傳 一
小川榮之進
北川 浩
富永信雄
柴田善守
西山子得
樋口善八
宮内勝藏
毛利榮吉
須戸源籍
杉本眞一

三年

二年

靈峰伊吹の雪も漸く解け初めて、湖國にも再び春は巡り来て、櫻花爛漫として金亀城下を彩り、野に山に人は行樂の時とはなりぬ三月、我が柔道部の闘將西島初段を初め、田中

村岡、辻川の諸兄を送り出したる我等は、加ふるに五年生たる部員皆無の爲、一方ならざる打撃を蒙りたれども、反りて一同の結束を固くし、奮然起ちて新チームを組織して、來るべき大會に備へるべく花を他所に猛練習を開始せり。

大日本武徳會第三十六回
全國青年演武大會出場之
記

斯くして花散り春は逝き、金亀城下に新緑濃く、風薫る初夏の候も何時しか過ぎて、校庭の木蔭にも蟬の聲漸く囁しく、山に海に人は慰安を求めて走るの時、玉なす汗を物もせず、或は關節を挫き、或は息が止りし事も幾度ぞ。我等はかく迄して光輝ある傳統を誇る我が彦中の爲、猛練習をも敢てし、選士の意氣正に壯、只管晴れの大會を鶴首せり。時は好し、七月の二十七日、京都岡崎武徳殿に於て開催される大演武大會出場の爲、憧れの京洛の地を踏みしめた。

鋭氣を養ふべく一夜を宿屋に過し、明けて二十八日は個人試合なりき。戦績左の如し、

東 之 方		西 之 方	
一一五回	兵庫姫路商校 (鳴浦晋一 二級)	三九回	兵庫尼崎中校 (伊藤三郎 二級)
一六四回	三重神戸中校 (野間末男 一級)	一九三回	山口校 (依光 博 同)
一九四回	本 校 (和田英夫 同)	一九四回	本 校 (島本光高 同)
二二六回	三重工校 (川邊太郎 同)	二二六回	三重富田中校 (草野 博 同)
二勝四敗	餘りにも芳しからざる個人試合を受けて、翌二十九日は愈々團體試合なり。選士の意氣は大いに高く、京都福智山中學と對戦し、戦前已に敵を壓す。我々之を一蹴せん。	二勝四敗	餘りにも芳しからざる個人試合を受けて、翌二十九日は愈々團體試合なり。選士の意氣は大いに高く、京都福智山中學と對戦し、戦前已に敵を壓す。我々之を一蹴せん。

敵は一廻轉して堂々倒れ、先づ最初の一歩を先取す。續く的場、我もミ、彼の敏捷さで、すばやく敵の後へ廻りて、諸共に倒れ、首をしめて敵を落し、又も一點を擧ぐ。中堅丸野は三年の若冠、よく奮戦せしも、敵よく之を攻め、押込まれて退き、敵に一點を許す。副將佐久間、攻勢に出でしか、敵よく之に應じ、業を取られて、その儘引分けとなりぬ。大將依光、敵を欺きて押へ込みし、彼の怪力見る間に跳ね起き、敵將を押へ込み、遂に我軍敵を軍門に下す。斯くして我等は悠々二次戦に出場するを得たり。

抽籤に依り二次戦は門司商業と對戦す。敵は二段を御大させる豪の者揃ひにして北九州に霸たり。我等意氣健昂以て此の強敵に當る

本校 門司商
先鋒 島本光高(二級) — ○ 緩本伊三(初段)
次鋒 的場 皎(同) — × 樽本慶樹(同)
中堅 福原快稔(二級) — ○ 田中康之(同)
副將 佐久間富雄(二級) — × 新田 勲(同)
大將 依光 博(同) — ○ 松野三三(二段)

けば、續く的場奮然起ちて、彼の小業よく敵を壓倒して之を押へ込みしが、あゝ、如何にせしか、審判一分間餘りも押込みしに遂に一本も取らず。引分けとなり我軍一點を逸す。福原三年なれどもよく頑張りしかど、もう時問云ふ間際に投げられて退く。副將佐久間攻めんとすれども敵頑強にして攻むるに由なく引分けとなりぬ。大將依光、立ちて敵二段に應戦す。寝技に引込みしに依り、審判「起て」を宣言す。然るに敵を儘の引込んで關節を取れば審判一本を宣言し、遂に我軍敵の軍門に下る。

我等武運拙く破れたりとは云へ、而も皆初陣の士なり、幸に來年こそは互に慰め合ひつゝ、暮色京洛の巷を覆ふの時、捲土重來を期して、軍中の人とはなりぬ

縣下中等學校武道不會出場の記

九月二十二日、我等の最も期待せる縣下大會は彦商に於て開かれることとなり。顧みれば部創立以來情敗に惜敗を重ねし我が柔道部。加ふるに昨年血の涙を流せしあの惜しき敗。我等が恨骨髓に徹し、我等四年生の若輩

必勝を誓ひて九月以來炎暑に玉なす汗を流し唯練習に練習を積みぬ。若輩とはいへ我等には赤鬼魂がある。創立以來の尊い歴史がある彦中健兒の意氣がある。この赤鬼魂を以て當ればいかに強敵とはいへ何ぞ恐るゝに足らん我等は前日校長先生の激励の辭を受け志氣いやが上にもあがり堅く、必勝せんことを誓ひ彦商道場に出場しぬ。喧戦はん哉、時到的戦はん哉、時到的。

本校 虎姫中學
先鋒 島本(二級) — ○ 伊吹(二級)
次鋒 的場(同) — × 大音(同)
中堅 佐久間(同) — ○ 川瀬(同)
副將 宮川(同) — × 三輪(初段)
大將 依光(同) — × 加納(初段)

先鋒島本、是が非でも敵を屠りて味方を泰山の安きに置かんものぞ猛然と立てり。然れども勝利の神、我に微笑ざりしか、惜しくも奮戦したれども、噫遂に引分けとなりぬ。佐久間敗れ、宮川分くるに及びて、大勢は遂に決しぬ。大將依光、彼の怪力を以てしても如

何さもしし得ず。我等は涙をのんで勝利を虎中に譲りぬ。

第二回戦は伊香農と戦を交へたり。

本校 伊香農學
先鋒 島本(二級) — × 西 條(二級)
次鋒 的場(同) — ○ 松 永(同)
中堅 佐久間(同) — × 藤 田(同)
副將 宮川(同) — × 木 島(同)
大將 依光(同) — × 今 井(初段)

我等は如何にもしてこの勝利を得て、二次戦への曙光を見出さんものさ大いに頑張りぬ先鋒島本引分け、的場惜しくも敗退するに及び、敵中堅以下徹底的の引分に出で、我伊農に敗れぬ。圖らざりき。伊農に敗れんとは。開部以來未だ嘗て敗れたことなき伊農に敗れんとは。許せ、七百の健兒よ。

二敗するに及び我等は遂に二次戦への出場資格を失ひたり。最後の彦工との一戦、我等如何にしても勝たざるべからず。

本校 彦根工業
先鋒 島本(二級) — × 藤 谷(二級)
次鋒 的場(同) — × 牧 野(同)
中堅 佐久間(同) — ○ 小 寺(同)
副將 宮川(同) — × 志 賀(初段)

大將 依光(同) — × 小 林(二級)
島本、的場惜しくも分け、中堅佐久間猛然立ちて遂に敵を屠れり。佐久間勝てりを以て宮川、依光共に分け、彦工を我等の軍門に下しぬ。

噫我等は一次戦に敗れたり。敗れたりとはいへ皆正々堂々の敗、何の悔ゆる所ぞ。たゞ七百の健兒の期待に副はざるを謝するのみ。許せ、七百の健兒よ。この惨敗を。

劍道部々報

陽春四月人の心は花に誘はれ、胡蝶は生の喜びをた、へて生きとし生けるもの皆は長閑な日光の下に躍々と活動する。

長き歴史、貴き傳統、今や金龜城下を色どる櫻の中に、春風を心よく窓より受けて眠れる英雄の夢まですはつらつたる氣合、非常時の若人は道場を狭し練習にいそしんでゐた我等劍道部先年の恥は今年こそ、心の中に一束をなして頑張らうと、山の鐘に誓つたものだ。

日のたつものは水より早く未だ春の夢さめやらで、山の鐘の響を思ふさき、それは初夏

の萌黄より來るのだつた。

練習練習、努力、意氣、突進、爆發、こぼれだけの單語を並べてもそれは我等の汗に及ばないだらう。汗を流して一心にたゞ動くときそれはあらゆる意味を含むのだ。

身体を練ることが學校へ、わが彦中への選手としての報である。健康と選手と學校。自も學校へも一舉兩得とはこの事だらう。

時來れば、一日も早く好機來れ。我等は意氣を示さん。戦ふの日來れば必ずや勝たん。けれども強者必ずしも覇者ならず。

六月二十三日
汽車は我等の勝利を祈る城山、學校、彦根町を去つて大津へと走つてゐた。今日は晴の全國中等學校劍道豫選大會當日である。

線の田面は水に映つて瀬田の唐橋は柳の緑をふき出して陽は丁度頭上高く輝やいてゐる自然は我等の心を盡く。初夏の風は白帆に唱ふ。
一同武徳殿支部へ乗込む。そして意氣は正に旺盛。對手は八日市中學と定まる。
空一面はうす曇つて雲の端に三日月がかゝる。岸川のせゝらぎは涙をおこさす。あゝ、何と云ふことだ夢ではなからうか。彼の新進

の八中に破るは。無念の涙は水に落ちて波紋が遠くへ消ゆ。聲が一つ一つと飛んだ。破る者の悲しき、こみ上げる苦しき我等を常に後援して下さる諸君に、何といへばよいのやら、諸君よ我等は今度こそきつと頑張ります。夜はふける。家路を急ぐ足もとに風は無情にからみつく。

七月二十五、六、七日

第三十六回青年演武大会

京都武徳殿に於ける大会は母校の名譽を全國に示す一大大會である。今度こそは、死んでも破れてなるものか。京洛の譽第一日個人試合の結果を考へる三勝五敗。けれども意氣は出した。たゞ破れるとも我等は全力を盡した。産中生としての元氣を。しかも明日は団体試合今日は個人の責として、明日は我が剣道部全員の責である。いざ戦はん正しく雄々しく。

明くれば七月二十六日午前八時二十分戦は將に開れようとしてゐる。嵐の前のしづけさ先鋒石田すつくさ立ちて敵に對す。敵は廣島二中。

本 校3——廣島二中2

先づ石田、望月、よく戦ひ二点を先取す。續く島本勝敗を一氣に定めんと敵を壓す敵もさるも島本惜くも小手を切られて退く。副將尾本決然として立つしかも無念又しても敵に名を爲さしむ。勝敗は我等が御大中島の腕にかゝる。頼むぞ中島。じりんとつゞく沈黙。突如「胴」さかき聲するごとくさべばはつしと胴を切る。「胴あり」審判の右手は高く第一戦を得。

本 校2——岡山一中3

夕暮迫る武徳殿一回戦を劈頭に終へた我等が最後に近く二回戦を戦ふはなんといふ悪い條件だらう。けれども最悪のコンチイションに我等は最善を盡すべきだ。

火蓋は切られた。島本に代つた三年生古澤尾本に代つた同じく居谷、先鋒居谷よく戦ひしが破れ續く石田、望月終に無念の恨をのむ終に勝は彼に與へられた。しかし古澤、中島は善戦し二点を擧ぐ。

夏休の一戦を失なつた我等。來るべきは縣下大會あるのみ。いざ今日から練習だ。八月の炎熱は天地をこがす。

九月十五日

彦根高商主催中等學校優勝剣道大會出場之記

五年生が兵營宿泊で三四年より出場す一回戦不戦勝

二回戦本校負——京都二中(大將戦)奮闘せしが今一步の所で退く。

九月二十二日

縣体育會主催武道大會

いよ／＼本年度最終の試合當日は來た。縣下大會がそれである。

第一次戦はリーグ戦でその優勝者四校の中に優勝試合が行はれるのである。

先づ對する敵は師範、彦商、大商、虎中であるしかもこの組は五校一組で他は四校一組だ。一次戦の戦跡次の如し

(1)本	校3——2師範	古	若	杉
望	月	目	近	杉
石	田	山	崎	崎
橋	本	松	岡	岡
中	島	若	野	野
(2)本	校3——2虎	古	辻	中
望	月	蓮	島	島
石	田	八	崎	崎
橋	本	河	川	川
(3)本	校3——2大	坂	村	商
望	月	木	野	野
石	田	牧	村	村
橋	本	北	川	川

●端艇部々報

我が部は昨年度の重鎮且つ功勞者たる井上大村、深井三氏を送り大なる打撃を蒙りぬ。然し昨年九月初より我等は光輝ある傳統的端艇部の爲すての黄金時代を再現すべく赤鬼健兒の爲に奮然起ち其の光を!!輝を!!四海に擴げんものゝ猛練習を開始せり。

二月の雪、霞の降る中を吾等親み深き湖上に漕出しぬ。伊吹山脈の山々は湖西比良の山に對して白衣をかむり正に我等を賞し唯一の見物者たり。オールな持手は固く氷りたゞ二感無く「母校の爲に」猛練習あるのみ。

今津遠征の記

三月三十一日午前十時我等は宮原先生同乗の上湖西今津に我等の愛艇「長等」を漕出しぬ。風静なれども畝り大きく時々トシブを洗ひき、四海の覇者を願ふ我等新クルーは元氣一林をオールに雪けり、東西の連山白雪をいたゞきて寒き身に雫を刺す如く感じたり。艇は艇速を早のども竹生島は遙か彼方に霞みたり。五分のロング毎に休息を取れり。飛行機此の終空をいつて爆音物凄く敦賀方面に消え

去るを見る。後十分のロングで靈島竹生島だ「頑張れ!!」此の頃より風少し強くなり西方は白波を立ち初めたり。「波だ」この先生の一言皆の者元氣最高潮に達したりき、波は次第に大きくなりしが我等は益々元氣を生み出しぬ風の方向は依然我れに不利ならしめ波荒く艇はサナガラ一葉の木の葉に似たり行方不定の涙ぐましい努力を續けたり。然し元氣一林。波は舷を越して艇内に入り頭より湖水をかむる事度々なり。

我等の力漕も風も波もに如何もし難くいかに強引をなせども艇進まず波は増々荒狂ふばかりなり。「近くだ」先生の聲!!我等は勇み立つ、此の時艇は少し進み少しは安心をせしむ、島の陰に來た時風波は島の爲に余程緩和されぬ。艇は矢の如く淺橋に向ひぬ、此の時の先生初め皆のほほえみいかばかり、波立ちてより一時間のロングの彼安着せし嬉しさ言語に絶すなり。何時か見しに時計水をかむりて彼立つこ能はず。

彦根より竹生島五里の途元氣満々漕ぎたりき、然し波益々荒く風吹きつものりぬ、たゞ神佛に波の靜かなるを誓るのみ。嗚呼如何んせん!!晝食を取りしが腹まだ満足せず。午後四

遂に又こゝに負る。あゝこの戦績を如何せん。昭和十年年度の武道部史の一頁は終にこんな結果になつてしまつた。よし結果は如何あらうともそれが全力を注いだものなら諸君はゆるしてくれらう。諸君よ我等は請ふ我等を後援して下さる意味に於て今後道場へ來てどうか僕等をしばつて下さい。よき後援者諸君を喜んで待ちます。

あゝもう五年生の人々は集立つ日が追つてゐる。そこに我剣道部員は我が校の美風を守つて最後まで有爲の士とならんことを祈り來年の頑張る期待して待ちたいと思ふ。

時竹生島を出発荒立な波を物ともせず津津に向う波は依然として強き加はるのみ。吾等は岸すたいに難航に／＼を續く。日は暮れ湖岸の燈火はちらほらと目に入れども目的地の津に未だ発見する能はず、或る漁夫に聞く「此より二十三町半島のむこうなり」と我等去悲想な決心の本に力漕に力漕を重ねたり併し如何に赤鬼魂を有する我等も機械の如くならず腹が！胸が！足が！否全身綿の如くになりぬ。お、腫れの今津!!今津を發見せし時の皆の喜び先生の顔は如何たりしか?

愛艇を今津中學艇庫に撃ぎ、ビシヨメレの洋服正しく重き足を今中寄宿舎へ進めたり目指せし懐の今津に上陸し我等大洋横断征服の感にほくそ笑みたり。おう!!今日の航程約十三里なり。

十二時今津出發、風まだ止まず、波荒しがごとく赤鬼健兒は勇々に／＼漕出しぬ。風北々西の強風たり、一圓北に向い其れより彦根眞一文字!!時々波舷より入りぬ、思出の竹生島を横に見た時より風波益々荒く艇は昨日よりは難航なり。波は山をなす!!トツプは水中につ、立ちて舵は空中にあり、其の傾斜角度何度たりしか。波一波毎に艇内に入水す、

本校創立記念日校内大會の記

五月一日彦根港灣には三色の旗元氣よく風に拂引き今日の記念日を祝す様なり。午前八時草木深き彦根港灣埋立地に本校創立記念を祝すべく端艇大會の式は擧げられぬ。やがて空には號砲響き渡り長閑に餘響を金龜の城へミタメはせぬ。風は西の紙風なりしが、時々通過する雲は雨を又季節はすれの霞を降らしぬれども赤鬼健兒はすぶ／＼になりしも艇走に陸上に元氣に満々たる若人の叫び終日場内に響ぬ。

校内運動部の對抗レース物凄く此れぞ海國男子の意氣にして且つ赤鬼健兒の意氣を表はせり。

嗚呼!! 美しき戦哉!!
勇しき戦哉!!

今や波上に聲無く太陽西山に傾きて、昔忍ばず金龜の城へ衝き出す鐘の音と共に天皇陛下萬歳を三唱し芽出度本大會の幕は閉じられぬ。

膳所中學競漕大會 出場の記

となりたり。兩艇は平平になる

「用意はよろしいか」
ズドン!! 優勝戦の幕は切つて落されたり

一本、二本!!...敵我先んずシート。二シート我等は力漕に力漕をかきぬれども「如何せん!!」試験中の事練習不足の結果遂に艇身を離されぬ。

「ラストベビー」我を忘れたた夢中にて漕げり!! 艇速早まればも平行する事あたはず

「ズドン」
「お、」我等は敗れたり。嗚呼惜き哉。京一中に二度も名をなさしめたるか...

瞬間港灣のごす黒き小波ははた／＼と舷をたたく。許せ諸君よ!!
「來り見よ八月の活躍を!!」
日は金龜の城に輝きやきて昔思はず彦中健兒の雄々しい姿を!!

京都帝大校内大會出場の記

祝せん哉!! 此の日六月九日初夏の候風は湖上を撫でる時再度の遠征を試みぬ。天は清澄。順流たる瀬田の流れに、飯へに／＼練り

我等は力漕に／＼を續けたり。風北に變し益々強き加へぬ、艇内は水一林なり!我等の座席にも／＼ばかりなり。彦根にはいかにもても近きこと能はずついに先生は孤島多景島に舵を向けられけり。

お!! 今津出發後四時間ついに多景島に着く、我等は三時間のロングを續けたり。日は西山にかたむけども波は強き加へるばかりなり。一里半の湖岸には彦根が見へども此れより彦根に向へば死より他道なし!! 我等の無念さいかばかりたり!!
ついに一夜を多景島に明かしぬ。

朝八時多景島を發せしが北西の強風吹きつりの艇は速力を減す我等は死力をもつて力漕に力漕を續け彦根へ願へが八坂に流されたり。艇は最早浮力を失ふばかりなり。

嗚呼!! 難航なりし此の遠漕た胸中涙一杯なり、今朝新聞紙「彦根端艇歸らず」の記事字一度に全員驚きぬ。過去を考へて見ればたゞ無言なり。

自動車にて毎校に向ふ。校長先生初め諸先生に出向へられし時、なにげなく涙頬をつたへり。心配をかけし我等は此の恩を忘れず、「勝つ」の言五体にしみ入りぬ。

明日ぞ我等の初陣ぞ!!高なる腕をおさへつ勝所へさ向ふ。

腕はうなる。スタートに向いぬ

第一コース 彦根中學

第二コース 京都一中

第三コース 奉公團A

吾等は奉公團の「おやじ」何者ぞ元氣に元氣を出しぬ。

「用意はよろしいか」? 準備不完了!

「まだ／＼」と叫べども審判艇は第三コースにあり。俄然大蓋は切られぬ。たゞ全員「漕げ漕げ!!」漕出しぬ、適早や吾に先する事一艇身半なり、吾等は力漕に／＼を續けり。

吾等の艇速早やまりたりて二敵を追ふたり見る／＼京一中においつきしが敵も死にもので漕ぎ出しぬ。早ゴール、ズドン!!の一音、ズドンの二音、すぐに三音が耳に入りたり元等の元氣旺盛たり、あ、!!敗れたり門出の一戦に敗れたり。

彦根高商端艇大會出場の記

五月二十六日一点の雲もなき初夏の絶好のコンシジョンに見舞はれ、我等の力をためさ

んとする高商の競漕大會は來たりぬ。過る年々玉と砕けし先輩の悲憤を思はゞ我等の腕は唸り心は復讐に高鳴れり。
必も勝つぞ!! 我等は唇をかみてスタートの合圖を待てり一瞬の静寂!! ドン!!!
戦の幕は切つて落されたり。一本、二本、三本。スタート調子よく二シート吾れ彼に先きんず。暫時並行

突!! 「ラストベビー」

吾等は漕げり。死を賭して戦へり!!...

敵艇速を増せり。

「ゴール」號砲一發。

「勝つた。勝つた!!」

第一着 彦根中學 タイム三分一秒

第二着 長濱農學 (差半艇身)

お、!! 勇行け。優勝戦へ!!

吾等は休息と戦法を練るために艇庫に歸り時の來るのを待てり。京一中のタイム三分三秒たり。吾等の方が早いぞと元氣に／＼を出す優勝戦だ!! 膳中での恥を雪げ雪げまばかり

に／＼たる我等の鐵腕を揮ふ時は來ぬ。恨は深し遺憾は長し瀨田の腕々たる流れ。

大敵何者ぞ!! いざや我等が怪腕で蹴散らさん。此の日本公團創立六十周年記念の校内大會で七校の出場たり。何者でも來らば來れ我等赤鬼健兒の意氣をしめさん。

等一回戦! 京洛の雄京都三中と確定せり。悠々とスタートに着く物凄きモーターボートの音天にミッるきぬ。

「ズドン!!」一時に水煙が立つ一本…五本ツッ!! 我等は一シート…二シート見る／＼内に敵のトップを下に見たり。元氣よく力漕に力漕を續けたり。差増々大となり五艇身「のびて行こう」のヨックスの聲も朗かに瀨田の流れに溶け入りぬ。數多の觀衆の中を!! 各校のスパイの目の光る下を!! パツクファアも出來る限り腕も五体も伸し行く我等見る者又頼母子の感を抱くばかりの落着き轟然たる號砲!! 「ゴールイン」

京三中はるか霞の中をあへぎ／＼漕ぎ來るを見る「勝つた!!」差七艇身なり。

是よ我がクルーの精力を!! 二回戦!! 滋賀中學自他共に許す恨深し勝中たり。瀨田に王たる膳中何者ぞ。

來らば來たれ。

我れに此の鐵腕と赤鬼魂あるを知るや知らずや。横風強く、艇は安定悪し。然し我等には大なる疲勞あり。敵は新手なり一回戦不戦一勝たり。

嗚呼!! 漕ぎに漕げ共亦我に利あらざりき。許せ諸君!! 喜の後に悲あり。

期得せよ我等最後の奮闘を!! 互に勵ましつゝ、次の大會の奮闘を約せり。

メンバー

舵手	福田隆治
整調	吉田庄一
五番	松村惠喜
四番	田中正義
三番	奥田末治
二番	瀧上昇
艇軸	三和録郎
M	川村甚郎

第三十三回全國中等學校優勝競漕大會出場の記

京都帝大友會端艇部主催

五年間一回戦に於て惜敗したる殘念さよ。

「今年こそは!!」意氣すでに天津の雲を風靡せるが如し。七月二十九日濱天津の合宿に入る。大會當日まで約一週間、殺氣立つたる合宿所に於て先生初め先輩諸氏の指導の下に猛練習に作戦に、餘念なし。

すでにして敵はなすはたゞ古來米子、松山新鋭唐津のみ「米子何者ぞ!!」と絶叫し赤銅より黒き腕を打ちたたひたすらに當日の壯觀を偲び、一日千秋の思ひたり。

又新しきバツク臺を長等神社に持ち行き我等の心勝を祈りたり。

七百の赤鬼健兒諸君よ!! 控室に又端艇部倉庫にある三臺のバツク臺は神がやどつてあるのだ!!

かくし八月三日例年の如く出場選手の懇親會が市公會堂で行なはれ。最後に番組抽籤行はる。

第四回(一回戦)

- 徳島中學 白 一コース
- 長濱農學 青 二コース
- 彦根中學 赤 三コース

一同合宿所に歸り密策を練る。密策さのひて自信滿滿たる顔を見合せ我等漕手六人は早く床につけり。

明ければ!! 八月四日前日と同じく天氣晴朗として我等の優勝を慶祝するか如し。

霞をかむる天津市中を縣社長等神社へ參すお!! 今日のおよき日!!

神の助あらしめよ!!

我等は默禱をさげたり。此の朝原田先生の引かれた御籤には「神は力の限り我をたすけん」この大吉なり我等は自信益々深まりぬ。

オールに御酒を吹きかけ元氣溢れ満ち七時半全出場選手を乗せた汽船は濱天津を離れ柳ヶ崎へ向いたり。

午前十時我等は先輩諸氏及び諸先生學友の涙まじし應援に必勝を期して乗艇せり。

さて我等は先づ最も馴れはる調子にてスタートに着く。敵二艇は共に我等がスタートサイドに見る。

いざ準備完了!!

嵐の前の静けさよ!!

漕手の黙々たる自信溢る五体!!

突然!! 轟然たる號砲一發 俄然火蓋は切られた。我が彦中の一大短所スタートも我等の血をもつてせし努力と幾度も失敗せし我等の尊き

經驗さにより、本大會中スタートの花形たる徳島中學に凌駕せし喜びいかにけり!!

お!! 我等の滑り出を見よ!! 三百米突通過 長農すでに一艇身をおくれたり。我等の歡喜の胸を以て腕ものびよオールも折れよ!! とばかりに得意のスタートで強引に強引を重ね。

應援の聯か? 長農急に艇速を加はへぬ我等はあせらず。お、尊き我が彦中の應援の聲よ!!

長農我先んずこゝ一シート、長農力漕に力漕を續げども一シート以上の差を求むるあたはず。ついにミドルニ來たりぬ。

轟然!! 「ミドルへピー二十」本見よ!!! 一シートをぬきかへしぬ。應援の聲身に染入ぬ。

オールは弓移をなすばかり。「接戦!!」

「ヨックス」の聲漕手の力強き應援我等は平然と強引を續く「ラストへピー」

「ヨシッ」漕手の一勢に應ずる叫び!! 見よ 依然我艇の急速なる進行を。

お、いぬくは／＼は敵は見る／＼後にさがりぬ。一シート二シート…半艇身、我

等は決死の努力をしめしぬ。突!! ドーン

勝つた!! 尊き神の力は我等にうつりたり、だゝ涙。長等神社に長き默禱を續けたり。

- 旺しく進め二回戦へ!!
- 第一着 彦根中學 タイム十分十九秒
- 第二着 長濱農學 差 半艇身
- 第三着 徳島中學

二回戦、東海の雄者、四日市商養何者ぞ我等の意氣大を突!! スタートに速くコンテイション悪く向い風強く、波も出でぬ。

一コース 彦根中學 第三コース 四日市商業

號砲!! 兩艇のアレッド等しく水を打つ我が艇早や一シートをぬく。二シート…益々差は數を増すばかり。我悠然としてロングピッチを以て敵を壓して進む。

五百米突通過!! 「スパアト十本」艇は艇速を加ふ、差一艇身半、又我等はロングピッチで進む。

千米通過!! 殆んど「ラストへピー」の必要を認めざるばかり悠々として我れゴールに入れり。

四日市商業二銭身う差をもつてあへぎ〜
ゴールに入る。

第一着 彦根中學 タイム五分三十秒
第二着 四日市商業 差二艇身
準優勝!! 勇んで進め!! 準優勝!!
去年の恨み思いしれ!! 宇和島

赤鬼健兒の意氣物凄くスタートに着く。用意はヨシ。波は美しくしき新艇「宇治」の勢をひたひたさた〜。

號砲天高く轟けば二艇は突進す、我スタートよく、二百米通過!! 一艇身を先んず。見れば敵速を加へたり。見る〜我に迫りたり。我等力の限り此れに應戦せしがどもおよばず一艇身半の差を取られたり。

お、應援の聲が!!
「ラストヘビー」「ヨシッ!!」
喜機先を制せんぞ、一擧にリードせんものと力漕!! 力漕!! 見よ!!
我がトツアのツーツーと進み行な!!

「死ね! 死ね!」我等は決死の努力を續けり。「後半艇身だ!!」「めげぬか?」
嗚呼!! ドン ゴールイン……

「後一本」我等は最後まで戦いぬ、然れども体格の相異如何ともする能はず。

茲に萬事休す!! 命なる哉!!
あゝ天なる哉!! 命なる哉!!

第一着 宇和島中學 タイム五分六秒
第二着 彦根中學 差半艇身
因みに當日の出漕者左の如し。

舵手 福田隆治 (五年)
整調 吉田庄一 (五年)
五番 三和録郎 (五年)
四番 田中正義 (五年)
三番 奥田末治 (五年)
二番 瀧上 昇 (五年)
艇軸 夏原憲一 (三年)

端艇部
部長 宮原先生
理事 原田先生
同 薄木先生

部員
五年 福田隆治 吉田庄一
三和録郎 田中正義
奥田末治 瀧上 昇
川村甚郎 松村惠喜
三年 夏原憲一 村井博一
辰己行雄 窓岡秀道
佐々木光春 橋本賢一

上げて下さい。
古き歴史の彦中を!!
五十周年を向へる彦中を!!
四海に名ある彦中に!!!
五十周年には各部月桂冠を得られん事を!!!
最後に榮ある端艇部部史に汚點を附した事を御許下さい。(田中記)

●野球部部報

選手
四年(主將) 安居 憲三 太田 英夫
川村 徳治 森田 泰造
若林 逸雄 上杉 襄司
馬場 兼吉 大日方正明
二年 江畑 太郎 上杉 英造
大森 敏三 細川 常雄
上杉 阿沙
一年 菅井 喜藏

然し「吾等は光輝ある傳統的野球部の一員だ」と一同大いに自覺する所あり、太田兄君の獻身的御指導の下に炎熱焼くが如き夏の日、或は寒蕪する様な雪天の日も一同勵まし合ひて猛練習を重ねたり。城山の暮鐘肅然と響くを聞きながら球を追ひし事決して一度や二度にあらず。
然し其の殺人的猛練習と言はば本年、來年の基礎工事には過ぎなかつた。故に吾等は彦中七百健兒の熱烈なる御後援の下に本年こそは、精進に精進を、練習に練習を重ね時機の到來を待つのみだつた

近府縣大會滋賀豫選出場之記

好期遂に到來す。則ち吾等は、本年度最初の大會たる。近府縣大會滋賀豫選に出場する事になつた。
第一回戦、本校對大津商業
四月二十一日、高商グラウンドにて大商先功の下に開始さる
第一回【大商】小西四球に出で横山の二個で封殺されたが菅江三遊間安打、堀口投飛、城第四球で二死満塁になれども小門三振

岩崎容堂 角田信三

回顧してみれば

昨年九月以來の努力も終に黄金時代を現出する事出來ず、親しき母校と別れなくてはなりません。

七百の赤鬼健兒諸君よ!! 許せ!!
然し我等は力の限り命の限り、努力をなしたのです。僕等は敗れました、体格も劣つて居ました、だが意氣は決して、否斷然勝つて居たと信じます。さればこそ我等は身を以て母校の爲に戦ひました。

愛艇「長等」に身を托し廣漠たる琵琶湖を相手に、オール折れよ……太陽は赫々として光り輝き共に僕等の苦しみであり又楽しみと思ひ出深き人生の一頁でありました。

敗戦! 又しても敗戦! 僕等は無念の涙のはふり落ちるのを如何ともし得ませんでした。
此の涙と特有の赤鬼魂を以て四年以下の諸君に述べたい。
諸君はスポーツに熱があるでせう?
それだつた運動部に入りなさい!!
そして、勉強は無論運動に於て彦中の名を

【本校】馬場四球直ちに二盗、太田一飛後、川村の投備馬場三壘で刺され、其の間に川村二壘を得ようとして刺さる

第二回【大商】上坂三振、中坊二個、青山四球、小西右飛

【本校】安居四球、捕逸で二進せんとして二壘に刺さる、上杉弟左前安打、上杉兄四球、大日方四球で一死満塁の好機を得、觀衆熱狂す森田の遊備は野選となり上杉弟最初の一点を擧ぐ、續く若林の遊備失に上杉兄生還、馬場の左越二壘打で三者生還、太田二飛後、川村安居、上杉弟、上杉兄と何れも四球で馬場、川村押し出されたが大日方遊飛、本校よく選球し七点を獲得大勢已に決す。

第三回【大商】横山四球、菅江の三個で封殺堀口三振、城第三飛

【本校】森田二個後、若林、馬場四球、太田の投前ゴロは野手の好投で太田一壘に刺されたが、其の間二者進塁し、川村の三個一壘惡投で二者共に生還、猶川村は二壘を得、安居の中前安打で長足生還、上杉弟四球の後、ダブカスチーム見事に成功し四上杉兄、大日方四球で安居又も押し出され、森田二飛。然れども本校又もや四点を擧ぐ

第四回【大商】小門一捕失に出たが、上坂の遊捕で重殺され、中坊一飛

【本校】若林四球に出たが二盗成らず、馬場四球、直ちに二、三連盗したが太田遊飛、川村二飛

第五回【大商】青山二飛、小西投捕、横山左飛で三者凡退し、五回コールドゲームで本校先づ、先陣よく敵を下す

先功商	大	合計					
西山江口第門坂坊山	小横菅堀城小上中青	1	2	3	4	5	合計
捕遊中左投二三右一	捕遊中左投二三右一	0	0	0	0	0	0
15打数	16打数	3	7	14	1	1	1
安打	盗塁	0	0	0	0	0	0
三振	三振	7	4	0	A	11	A
失策	失策	1	0	0	0	0	0
二壘打	二壘打	0	0	0	0	0	0

四月二十七日午後三時より高商校庭にて戦ふ。長商充功

第一回【長商】北川遊飛、中島中飛、三橋三振で三者凡退

【本校】馬場二、二の後一打すれば左翼感の本壘打となり本校先づ一点を先取、若林右前安

打直ちに二盗、上杉弟四球、續く川村、安居上杉兄四球で若林、上杉弟押出さる、大日方一飛、森田右飛で川村生還、其の間に安居、上杉兄進壘、續く太田、馬場四球で安居生還若林の二飛で漸く交替すれども本校早くも、五点を奪得(長商○本校五)

第二回【長商】田中式飛、東城四球、廣瀬三飛後大橋四球で出たが、坂東三振

【本校】上杉弟一飛、川村一壘フルフライで二死後安居四球にて直ちに二、三盗し捕手の三壘悪投で生還、續く上杉兄も四球に出、捕手のパスボールで進壘し大日方の中前安打で歸り、森田二個(長商○本校二)

第三回【長商】宮川三壘フルフライ、北川三振、中島遊捕で又もや三者凡退

(長商○本校一)

第四回【長商】大日方投手の肩愈々見事に定り、三橋、田中何れも三球で三振、東城二飛【本校】川村三振、安居右飛、上杉兄四球に出たが大日方打者の時、投手牽制球にか、り一

二壘間で憤死(長商○本校○)

第五回【長商】廣瀬三壘、大橋捕邪飛後、坂東四球に出壘したが宮川三振

【本校】大日方三振、森田の代打者門野四球後投手の牽制球にか、りて刺さる。大田四球に出、二盗したが馬場ランドボール後三振ナツトアウトで一壘に刺さる(長商○本校○)

第六回【長商】北川中飛、中島三飛、三橋左飛で無爲

【本校】若林二個、上杉弟左前安打、二壘を取らんとして刺さる。川村遊捕失に出二盗後、安居投飛(長商○本校○)

第七回【長商】田中三振、東城左飛、廣瀬遊擊の左を抜いて出たが大橋の二個で封殺され八對〇、七回のコールドゲームで本校勝つ。

思ふに本日の勝因は守りては大日方投手の好投、攻めてはムラのない打撃陣でよく選びて打つべき時はよく打つた爲である。兩軍メンバ次の如し

商	川島橋中城瀬橋東川
長	北中三田東廣大坂宮
	567810943

中	場林村居見方田野田
彦	馬若上川安上大森門太
	4965371882

先	長商	00000000	0
彦中	5210000A	8A	0

第三回戦、本校對勝中

かくて準備勝で本校は昨年の強豪、膳所中學と組む。此の一戦に勝てば奈良の第二次戦出場権を得る事が出来るので全員意氣天を衝かん程にして戦前既に敵を壓す。

日時、四月廿八日午前十時五十分
球場、彦中球場
膳所先功
第一回【膳中】北垣左飛、岩見三個、佐々木四球、谷澤三個

【本校】馬場三振、若林二遊間安打に出で二盗し上杉弟の遊捕一壘失で三壘に進む、上杉弟も二盗し一死ながら走者二、三壘の絶好のチ

ヤンスを掴む、安居の遊捕で若林先づ生還で最初の一点を擧ぐ。川村三振(膳中○本校一)

第二回【膳中】中村源二個、中村三振、中村清一個で無爲

【本校】上杉兄三個失に出で二盗す、大日方四球後、森田の三個で上杉兄三壘に封殺され、太田の一個で二者進壘したが馬場三個(膳中○本校○)

第三回【膳中】橋本三個失で出壘したが澤井三飛、北垣中飛で二死後、二盗成らず

【本校】若林三個失に出で俄然二壘をも奪はうとしたが三壘手の送球で惜しくも二壘に刺さる。續く上杉弟ストロートの四球に出で安居の二個失で進壘した後川村の三個は野選となり一死ながら満塁のチャンスを作る。上杉兄の三個で上杉弟本壘で封殺されたが、大日方の中前安打で安居、川村生還し上杉兄三進す森田打者の時大日方二盗す。森田の遊捕一壘失で上杉兄得点し大日方三進、太田の二個一壘失で大日方生還、此の時一壘手から捕手に投球されるを見て森田三盗せんとして刺さる(膳中○本校四)

第四回【膳中】岩見三壘頭上を抜く二壘打で出たが、佐々木三振、谷澤二個、其の間岩見

三進すれども中村源投捕

【本校】馬場左翼左を抜く三壘打を放す若林の三個で生還、上杉弟二個失、安居遊捕失、川村の遊捕で上杉弟三壘で封殺されたが、安居川村の重盗成り猶もチャンスと見えたが上杉兄三振(膳中○本校一)

第五回【膳中】中島三飛、中村清投捕、橋本二飛で三者凡退

【本校】大日方三遊間安打に出たが森田の三個で封殺、太田の二個で森田封殺、馬場の遊捕で太田二壘に封殺さる(膳中○本校○)

第六回【膳中】澤井ストロートの四球、北垣遊越安打、岩見の遊捕で北垣二封されたが澤井三進、佐々木打者の時岩見二盗し、一死走者二三壘のベンチに響ける、佐々木の二個失で二走者生還、續く谷澤も遊撃越安打した後佐々木三盗しホークで生還。中村源遊飛、中村四球で出たが、中村清中飛。然れども敵よく打ち三点を返さる

【本校】若林三前内野安打、上杉弟四球で五度チャンス来る、安居左越二壘打で若林生還したが、上杉弟も本壘を奪はんとして投手のカツトよく三壘に刺さる。川村の二越安打で安居生還後、上杉兄四球で猶も有望と見えたが、

大日方左飛、森田遊飛に終る。然し二点を加へ勝利愈々濃厚なる(勝中三本校二)

第七回【勝中】橋本三嗣後、澤井三盛二、北垣左前に何れも安打したが、岩見三飛後、兩者の重盗成らず澤井三盛に刺され吾軍の守備陣猶も固し

【本校】太田二嗣後、馬場左前安打を快足を利便して二壘打と成し更に左翼手の二壘打悪返球で一塁生還す。實に彦中のラツキ一ボーイなり。若林遊飛、上杉弟四球直ちに二盗したが、安居遊飛(勝中○本校一)

第八回【勝中】佐々木二嗣、谷澤三嗣失、中村源中飛、中川の三壘側の軟弱は遊撃手の野選となり走者一、二壘によつたが中村清三振

【本校】川村前安打に出、上杉兄の三壘で二進し、更に大日方の遊越安打で三進したが森田投簡、其の間に大日方二壘進で太田の一壘期待されたが措しくも三飛(勝中○本校○)

第九回、愈々ラストニ入り吾軍之以上点を入れさじと一同互に勵まし合つて守備位置につく。

第四回【八商】平岡、須田共に三割、塚本投簡

【本校】上杉弟三振、安居遊飛で二死後、川村左前安打に出疊したが上杉兄投簡(兩軍○)

第五回【八商】安村中飛、田中死球に出たが西澤投飛、青木の遊飛で田中二封さる

【本校】大日方投飛、門野一簡、太田三簡で無爲。兩軍の守備固く、兩投手凡打主義に出で投手戦を續ける

第六回【八商】伊藤三飛、島田三簡、平岡遊簡

【本校】一番打者よりの好打順を叩へ波亂を起すだらうと期待さる。馬場三簡失に出で無死でランナー一壘の三回目のチャンスを得る。然し後援續かず若林惡球に手を出し三振、上杉弟の二壘手後方のラスイは中堅中よく前進して取つたがぼろりさ落し馬場を二壘に封殺す。安居三飛で又もや好機を逸す(兩軍○)

第七回【八商】須田、塚本共に三壘失に出で安村の遊撃前の軟ゴロは内野安打となり無死満塁の絶對的ピンチにあたる。八商方の應援團俄かに騒ぎたつ。然れども安居投手以下全員少しも動遙せず逆に愈々緊張す。安居主將全員を激勵して落ち着いて球を投げこみ先づ

のスコアカーブをよく打ち又は選球し壘に出ては巧みな走壘によつて敵軍の膽を寒からしめた。然し敵の守備陣には多少の失策あり。雖も三、遊撃方面の守備又侮るべからず。かくして奈其の第二次戦の出場權を得る。兩軍メンバ次の如し。

先中	0	0	0	0	3	0	0	0
勝中	1	0	4	1	0	3	1	0
中	1	0	4	1	0	3	1	0
彦中	9	A						
捕	垣見木澤	川本井						
中	北岩佐谷	中中橋						
捕	中左三右	一三遊						
中	43	7	0	3	3	1	0	
彦	4	0	9	1	0	2	5	7
中	2	1	0	2	5	7	2	1
捕	馬場	居村見	方田田					
中	馬場	上安川	上大森					
彦	二右遊	三左一	中捕					
中	二壘打	岩見、安居、馬場						
彦	三壘打	馬場						

田中を投飛に打取る。續く西澤と須田との間のスクイズを見抜きウエストボールを投げてスクイズを防ぎて西澤を三振せしむ。其の態度流石に百戦老功の士たるかなの面影あり。續く青木の飛球を遊撃手よく掴み巧みにピンチを切り抜け彦中應援團の歡喜筆古に盡し難し

【本校】川村打ち返さんもの奮然とボツクスに入つたが、遊飛上杉兄三振、大日方遊飛。ラツキ一セアンを終ると猶も○對○の平均な破れず兩軍必死に戦ふ

第八回【八商】伊藤左前テキカスで一壘に出る。續く打者は八商の主將であり唯一のストラツガーである島田なりワンツウの後胸の邊のボールを打てば速く左中間を抜く。左翼手上杉兄よく追ひ際までバック又バックと背走しあはやボールを取つたと思はれたが實に寸分の差で惜しくも取り得ず。爲に三壘打となり伊藤勇躍ホームインして最初の一点を擧ぐ無死にして猶走者三壘たれども後續者を或は二飛或は殺簡、或は投簡、或は三振で打取つたが遂に一点を入れらる

【本校】門野一邪飛、太田スリーナセングの後安村投手の快腕に押されて三振、感激性に富

勝戦としては最適當の日なり。然るに戦前より兩猛烈に降り一時中止説あれども悪コンテ一ツオンを冒して戦ふ。八商先攻

球審 本校
球場 本城
球審 村井 疊審 西田、伊藤

第一回【八商】島田第一球を叩ひ満身の力を籠めて打てばぐんぐん、白球は伸び中堅の頭上を越す二壘打となり本校最初からピンチに襲はる。續く平岡の投前バンドで三進したが須田とのスクイズ成らずして本壘寸前で刺さる、須田投簡、吾軍見事にピンチを逃れる

【本校】馬場三振、若林二簡、上杉弟三簡で無爲(兩軍共に○)

第二回【八商】塚本三簡、安打遊飛、田中も遊簡

【本校】安居投簡後、當り家の川村遊越安打に出づ。續く上杉兄左飛、大日方三遊間を抜き俄然チャンスと見えたが森田の代者門野三球で惜しく倒れる(兩軍共に○)

第三回【八商】西澤三簡、青木左飛し二死後伊藤四球に出たが島田捕邪飛

【本校】太田遊飛一壘飛投で二進したが投手牽制球に刺され、馬場、若林共に投簡で又もや好機を逸す(兩軍共に○)

む我がリテアングオフマン馬場奮然として一打すれば三越安打と成り馬場野手の油断に乗じ一擧二進すれば左翼手から二壘への返球は暴投となりカバーせる一壘手の二壘への投球は更に暴投となり馬場よく三壘を陥れる。實に果斷にして一寸の機會をも無駄にしなかつたのは天晴れなり。次打者若林應援團の聲援に送られてボツクスに入つたが不運にも二簡に倒り馬場三壘に殘壘(八商一本校○)

第九回【八商】安村左前安打に出たが、田中左飛、西澤三振、青木右飛で無爲

【本校】愈々ラストに入り彦中應援團總立ちとなり其の熱烈なる聲援に選手一同も心中で泣かざる。然し人間は神にあらず。上杉弟先づ投簡に一死。續く安居主將味方の不好調を一擧に取り返さんもの満身の力を兩手に籠めて一打すれば球は速く左中間に飛ぶ。さてはと思ふのも束の間にして八商の左翼手青木背走又背走して好捕す。安居主將の心中や何如然れども我未だ戦を捨てず。即ち川村三本目の安打を中堅左に放つ。續く上杉兄の一打を頼りとするのみ、ツッボール後安村力投してストライクを二つ取る。かくしてカウントは

ツーストライクツッボール。愈々第五球目が

投手の手から放れた。上杉兄待つてたりばかりに振れども球は鏡くカーブして無念にも三振。球審はゲームセットを告ぐ。選手一同黙然として聲無し。嗚呼、此の悲憤たる心持は誰ぞ知る。唯校友會諸兄の寛恕を乞ふのみ。メンバー次の如し

先商	0	0	0	0	0	0	0	1	
八	1	2	3	4	5	6	7	8	9
彦中	0	0	0	0	0	0	0	0	0
計	0	0	0	0	0	0	0	0	0

先商 田岡田本村中澤木藤
島平須塚安田西青伊
遊中二捕投三右左一
33 1 5 1 3 2 0 1 1
打点安振死壘打
得安機三四盜壘打
0 5 0 7 0 0 0 0 0
3 3 0 5 0 7 0 0 0 0

敦賀遠征の記

五月五日敦賀に遠征し敦賀商業と同校庭に戦ふ。敦賀は前年の全国大會で準優勝まで進

西左中間に二壘打を放ち三壘をも陥れしして野手の好リレーに殺さる。木本左前安打、吉田左翼で本校の好守で無爲
【本校】馬場左前安打、上杉の機打は捕邪飛なる。安居の遊直を野手巧に落して逆に馬場を併殺す(和中○本校○)
第二回【和中】稲田中飛、田村四球、有本中飛後、高嶺も四球に出たが辻村の左前安打で田村本壘を突き左翼手の好投で本壘打寸前に刺さる
【本校】川村、上杉兄共に三振、若林遊備
第三回【和中】宇野遊備一壘失に出づ。山西右飛、木本四球、吉田投飛、稲田の左前安打で宇野生還、田村遊飛、然し敵遂に一点を入れる
【本校】天日方三壘、森田三振、太田三振で無爲(和中○本校○)
第四回【和中】有本一飛、高嶺左飛辻村右飛で三者凡退
【本校】馬場三振、上杉弟遊飛打、安居四球に出たが川村三振(兩軍○)
第五回【和中】宇野中飛で一死後山西中前安打、木本の三備は野選となり走者一、二壘吉田の遊撃強襲で山西生還。稲田四球で満壘

んだ強者のもの。然れども吾等大敵と雖も恐れずして遂に此の命的を射る。
第六回【本校】森田三振の後、大日方四球、馬場の遊備を野手大日方を封殺せんとして二壘に悪投し大日方一壘生還、馬場は二進、續く上杉弟三振したが川村死球、安居の三遊間安打で馬場生還
第九回【敦商】芝原左飛、津田四球、丸川左中間安打、壁の中前安打で津田本壘を襲つたが中堅手の好投で憤死、南保三備

先中 場村居見田林田方
彦 村上川安上太若森大
二遊三投左捕右中一

敦商	28	2	3	8	4	3	0
彦中	28	0	4	6	5	6	1
打点安三四殘失	28	0	4	6	5	6	1

本校對彦根高商
五月八日高商校庭に於て戦ふ

の時田村死球で木本押し出され更に投手暴投で二者生還。有本三邪飛、高嶺二飛、敵よく打ち四点を加へる。
【本校】上杉兄三飛、若林二越安打で出たが大日方の遊備で封殺され森田三邪飛
第六回【和中】辻村左飛、宇野四球に出たが投手の牽制球にかり刺さる、山西投手強襲安打に出たが木本中飛
【本校】太田二備、馬場三振、上杉弟投備で全く稲田投手に封じらる(兩軍○)
第七回【和中】吉田左中間二壘打に出で稲田の二壘打で生還。田村左飛後有本、高嶺何れも三壘打を放ち二点を入れ、更に辻村、宇野四球に出で山西二飛後木本の四球で満壘、吉田の遊備失で辻村生還したが稲田の遊備で吉田二封、和中長打四本を續げ五点を加へる。
【本校】安居遊飛、川村、上杉兄共に三振(和中五本校○)
第八回【和中】本校投手大日方となり安居一壘に入る。田村、有本三振後、高嶺四球に出たが辻村中飛
【本校】若林、内野安打に出たが大日方、森田共に三振、太田二壘上を抜く安打で走者一、二壘によつたが、馬場遊備(兩軍○)

先中	0	0	0	0	0	0	0	3	
高商	1	2	3	4	5	6	7	8	9
計	0	0	0	0	0	0	0	0	0

中 場村居見田林田方
彦 村上川安上太若森大
二遊三投左捕右中一
高商 川生淵川村井本山木
石栗馬成中橋有杉猪
中一遊投左捕二右三

近府縣第二次出場文記

奈良の大會の出場権を得た吾部では四年生が修學旅行を断念して鋭意練習に勵む。相手校も紀伊の古家と歌山中學と定まり五月十二日奈良に向ふ。翌十三日春日野球場にて坂井本田兩隊列の下に和中先攻で開始さる。
第一回【和中】宇野三前セーフナポイント内野安打となり更に二盗せんとして刺さる。山

先中	0	0	1	0	4	0	5	0	3
和中	1	2	3	4	5	6	7	8	9
計	0	0	0	0	0	0	0	0	0

第九回【和中】宇野左翼左を抜二壘打に出で山西の遊備で三進す。木本は三飛失に出で二盗し吉田の遊備一壘失で二者生還。吉田二進す。稲田の三遊間安打で三進、田村三邪飛後有本の投手強襲安打で吉田生還後有本刺さる
【本校】最後の攻撃も空しく遂に十三對〇で惨敗す。餘りにも情ない戦績だ。六百の健兒に合す顔がない。然し我等は最後までベストを盡した。惜むらくは若冠未だ試合の経験淺く十分其の力を發揮する事が出来なかつた。が一方考へれば此の試合により我等は多くの資料を得る事が出来た。今後此の経験によつて一層猛練習を積むべき事を感ず。
因に當日の選手次の如し

中 二弟居村兄林方田
 杉安 杉上川上若投森太
 馬遊三左右一中捕
 二壘打 山西、吉田、稻田(2)、宇野
 三壘打 有本、高臺
 本校對京都商業
 六月九日綠ヶ丘球場で京都商業と練習試合を行ふ

先商	0	0	2	0	1	0	0	0	1
京	1	2	3	4	5	6	7	8	9
本校	0	0	0	0	0	0	1	0	0
計	1								

出子路田田野橋藤山
 北金富山吉中石遠栗
 中左遊捕三一右二投

中 場林村居兄弟田田方
 杉杉 杉上川上若投森太
 馬若川安上上太森大
 二右三一左遊右中投
 二壘打 安居、中野
 本壘打 上杉弟

先商	0	0	0	0	0	0	0	0	0
京	1	2	3	4	5	6	7	8	9
本校	0	0	0	0	0	0	0	0	0
計	1								

京津大會滋賀豫選の記

春以来餘り香しからの戦績を残したる吾部は今度の京津大會にはこの體積を晴して諸兄達にわびんものと連日の炎熱なものとせぜ慶大の平樹選手コーチの下に猛練習を重ねたり。

かくて七月二十五日、必勝を誓つて一路大津に向ふ。戦績次の如し

第一回戦 不戦一勝
 第二回戦 本校對彦根商業
 七月二十六日、村井、中野、益野三審判の下に開始、彦商先攻
 第一回【彦商】谷口右飛、丸山三振、寺井三捕で三者凡退
 【本校】上杉弟三越安打、若林の犠打に進んだが、馬場三邪飛、上杉兄三振(兩軍〇)
 第二回【彦商】田中投捕、本川二飛、川崎二捕

【本校】川村三振、安居四球、大日方、森田共に三振(兩軍〇)
 第三回【彦商】上杉三捕失に出たが前川の投飛重殺、仲谷二飛
 【本校】太田投捕、上杉弟遊飛、若林三捕(兩軍〇)

第四回【彦商】谷口遊撃に出たが、丸山三振の時捕手落球に二壘を得んとして刺さる、寺井投捕

【本校】馬場中飛、上杉兄死球で出壘し捕逸で二進したが、川村の遊捕で三壘に刺され、安居三捕失で走者一、二壘に出れども大日方の遊捕で安居二封(兩軍〇)
 第五回【彦商】田中二捕失で出たが本川三振後川崎の遊捕で田中封殺され、上杉の遊捕で川崎も二封さる

【本校】森田遊捕、太田中飛後上杉弟遊捕失で出壘し若林の右越三壘打に長足生還、馬場左飛、然れども本校一点を入れ元氣愈々振ふ
 第六回【彦商】前川遊捕、仲谷三振、谷口左飛
 【本校】上杉兄三捕、川村二捕後安居、大日方四球、森田三振(兩軍〇)
 第七回【彦商】丸山二捕、寺井四球に出たが投手の牽制球に刺され田中三振
 【本校】太田遊捕、上杉弟投捕、若林捕邪飛(兩軍〇)
 第八回【彦商】本川三捕、川崎遊飛上杉二飛大日方投手の腕愈々物凄く各回共三者凡退に退ぞける

【本校】馬場左直失、上杉兄の捕前ゴロで二進し更に三盗したが川村邪飛、安居三捕で好機を逸す(兩軍〇)

第九回 敵愈々最後の攻撃に入り前川中前安打に出て仲谷の一捕で進壘し本校ヒッチに襲はるれども谷口二飛、丸山投捕で遂に彦商をして吾軍門に降らしむ

先商	0	0	0	0	0	0	0	0	0
京	1	2	3	4	5	6	7	8	9
本校	0	0	0	0	1	0	0	0	0
計	1								

中 弟林場村居方田田
 杉杉 杉上川上若投森太
 上若馬 上川安 大森太
 遊右二左三一投中捕
 三壘打 若林

第三回戦 本校對八幡商業
 去る四月八幡商業の爲に恨みをのみし吾軍は以来臥薪嘗膽、打倒八商の念物凄く猛練習を積みしが遂に時機は到来せり。吾等は會稽

の恥を雪がんものと勇躍綠ヶ丘に向ふ。かくて二十七日、友宗、西田、長谷川、伊藤四審判の下に八商先攻で開始さる。

第一回【八商】平田、投手の肩の定まらざるに乗じてストロートの四球で出壘し伊藤の犠打で二進したが更に塚本の三捕で三壘を得んとして刺さる。續く島田左飛

【本校】上杉第四球に出て若林のバンドは野選となり走者オールセーフ、馬場の犠打で走者二、三壘に進壘す、續く川村の左翼三壘打で二者生還し猶有望であつたが上杉兄遊捕、安居申飛(八商〇本校二)

第二回【八商】安村右飛、須田三振、田中二捕で無爲
 【本校】大日方三捕後、森田左前に太田三壘越に安打を放てども上杉弟の三捕で、三壘一壘で重殺さる(兩軍〇)
 第三回【八商】長谷三遊間安打、青木の投捕は野選となり、平岡の左前安打で長谷生還、續く伊藤の犠打で走者二、三壘に進み本校縮ヒッチであつたが塚本の三捕で青木本壘に突き三壘手の好守に刺され、塚本二盗せんとして刺され本校巧みにヒッチをぬける
 【本校】若林遊飛、馬場四球に出たが川村三振

後馬場投手牽制球で倒る(八商一本校〇)
 第四回【八商】島田左飛、安村左翼二壘打を放つたが須田投捕、田中投捕

【本校】上杉兄捕前ゴロで一死後安居右越二壘打に出て大日方の一捕で三進し森田四球を選んだが太田三捕(兩軍〇)
 第五回【八商】長谷遊飛、青木三捕、平田遊捕

【本校】上杉弟三捕、若林中飛後、馬場左越三壘打を打ち川村の左前安打で生還、上杉兄の遊捕で川村二封殺(八商〇本校二)
 第六回【八商】伊藤遊捕、塚本投捕、島田三捕失に出たが二盗に刺さる
 【本校】安居左翼三壘打を放ち大日方の犠打で進壘し更に投手の三壘悪球で得点す、森田三振、太田三捕、然し本校一点を加ふ(八商〇本校二)

第七回【八商】安村遊捕、須田左前安打に出て田中の右前安打で三壘まで進む。其の時右翼手の三壘に投げるを見て田中二進せんとして三壘より遊撃へミスを投ぜられて田中二壘に憤死、續く長谷の中前の小フライを野手落して須田生還、青木二捕
 【本校】上杉弟四球、若林の遊捕で封殺された

が馬場左翼安打、川村三振後上杉兄四球で二死満塁の時安居右翼を抜く三壘打を打ち走者一掃す、大日方三振(八商一本校三)

第八回【八商】平岡三越安打、伊藤の三壘で封殺、塚本四球、島田四球で満塁の時安村の三壘の左を抜く安打で伊藤生還、其の時島田二壘を出過ぎて刺され須田三飛で本校ベンチを脱す

【本校】森田一壘後太田、上杉弟四球に出たが若林二飛、馬場三振(八商一本校〇)

第九回【八商】最後の攻撃に入れども三者凡退で退きて遂に吾軍門に降る。斯くて吾等は春の恥を雪ぎて名譽を回復す
當日のメンバー次の如し

先校	八	0	0	1	0	0	1	1	0	3
彦中	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計
入	2	0	0	0	1	1	3	0	A	A7
中	2	0	0	0	1	1	3	0	A	A7
彦	2	0	0	0	1	1	3	0	A	A7

二壘打 安村、安居(二)
三壘打 川村、馬場、安居
優勝戦 本校對膳所中學
八幡商業を破りて恨みを見事晴らした吾等は愈々意氣激烈に膳所をも一掃に撃破して榮えある優勝旗を金亀城下に持ち歸らうと晴の試合に出場す。其の日の天候たるや、絶好の野球日和にて優勝戦にふさはしき日なり。斯くして、午後二時、友宗(球審)原、藤田、中野(壘)四審判の下に開始さる。膳所先攻
第一回【膳中】北垣遊捕、岩見三壘失に出で中村源の三壘に送られ佐々木四球後、岩見と中村との重盗成り走者二、三壘に進塁す。谷澤の三壘失で岩見生還し佐々木も三壘を越へて本壘を陥れんとしたが三壘手の送球に刺さる、然れども敵よく吾守備を亂して一点先取す
【本校】上杉弟三壘、若林投捕、馬場遊捕で無爲

第二回【膳中】(本校投手大日方となり安居一壘に退く)澤井四球に出で二死後二盗し更に捕逸で三進したが中川三振
【本校】川村三壘後、安居三壘の左を抜き上杉兄四球、大日方中前安打で一死満塁の好機を

獨りども森田中飛、太田三振

第三回【膳中】北垣、岩見共に中前安打、中村源左翼後、北垣三盗せんとして刺され佐々木三振

【本校】上杉弟三壘、若林投捕、馬場二遊間安打に出たが二盗成らず

第四回【膳中】谷澤、澤井三振、岡本二盗
【本校】三者凡退

第五回 膳中無爲
【本校】大日方四球、森田の犠打で二進、太田四球、上杉弟三振若林四球で満塁となつたが馬場投捕

第六回【膳中】佐々木中前安打に出たが後援續かず

【本校】二死後上杉兄、大日方、森田の三者四球に出たが太田投捕

第七回 膳中無爲

【本校】一死後、若林、馬場四球、川村中飛安居も四球で四度満塁となつたが上杉兄三振

第八回 膳中三者凡退
【本校】太田の左前安打ありしが無爲

第九回【膳中】澤井遊捕失に出づれども無爲本校愈々最後の攻撃に入り頑勢を奪回せんといれども敵の好守を抜く事能はずして遂に敗る

嗚乎、昨日八幡商業を降せし吾等の今日の戦敗を誰か豫期したらうか。戦は時の運と雖も今日の敗戦全くあきらめる事能はず。唯七百の諸君達の寛恕を請ふのみ
メンバー次の如し

先	膳中	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1
彦中	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
中	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
彦	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

京大第二二次戦出場之記

膳中に空しく敗れたる吾等は先輩諸氏の御熱心なる御指導を受け来る二次戦には是が非でもベストコンパイションで戦はんものご意練習に勵む。相手は全國に名を知られたる平安中學及び京都一商。相手には不足はす

がない。抽籤の結果遂に京一商と會ふ。然れども吾等一寸も恐れず。唯運を天に委ねて戦はんのみ。かくて八月二日、本校先攻で開始さる。

先	中	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
彦	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
中	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
彦	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

馬場三飛

【京一商】熊谷遊捕を抜き二盗し糸井(勳)の中前安打で三進、續く糸井(一)の中飛で生還したが後援無し
第二回【本校】二死後上杉兄遊捕失、大日方四球に出たが森田遊捕
【京一商】三久保投捕一壘惡投に一舉二進し望月の遊捕失で三壘を得、望月も二盗して走者

二、三壘に寄る、鈴木投捕後福島の二壘を野手好守して本壘に投げたが捕手落球して三久保生還、福島二盗後永棹三振したが熊谷の中前安打で望月、福島生還、糸井(勳)三壘で終れども敵早くも四点を擧げる

第三回 本校無爲
【京一商】望月、福島の二安打で二点を加ふ。

第四回 兩軍無爲
第五回【本校】森田四球に出たが得点とならず

【京一商】糸井(一)安打に蒲田四球に出壘されども後援無し

第六回【本校】上杉捕那飛後、若林、馬場四球後、安居一、二壘間を抜く安打を放ち若林一舉本壘を襲つたが野手の好投でホーム寸前で刺さる。川村中飛、京一商無爲

第七回 兩軍無爲
第八回上杉弟三壘失に出たが若林の二壘で重殺。京一商無爲

第九回 本校最後の攻撃に入れども安居左飛川村、上杉兄三振でゲームセットとなり京一商をして名をなましむ

昭和十年八月二十一日、新チーム編制後最初の練習を、只あの榮冠を得んが爲に強い決